

日文研

2014年9月

no.53

International Research Center for Japanese Studies

国際日本文化研究センター



日本の警護所（デ・フリース『東西インド奇事詳解』1682年版所収）

『東西インド奇事詳解』に収録されている約80枚の銅版図のうち、日本のみを対象として描かれた二枚の図版の一つである。この図版は江戸城を背景とする日本の警護所を描いている。前方に描かれている武士は囲碁のようなゲームに興じている。中央の広場では武士たちが馬上訓練を行っている。これは流鎗馬から連想されているのかもしれない。本図はデ・ホーヘという17世紀オランダの有名な版画家が作成した銅版図である。デ・ホーヘは日本への渡航経験はなく、『東西インド奇事詳解』のテキストを手掛かりに想像上の日本像を描いている。オランダ語のキャプションの和訳は次の通りである。

日本の警護所 1. 日本の警備兵および警護所 2. チェス・ゲーム 3. 茶という飲み物 4. 提灯 5. 歩哨 6. 馬上訓練 7. 徒歩訓練 8. 江戸城

日文研所蔵外書（解説：フレデリック・クレインズ准教授）

日文研

マルクス・リュッターマン

「過程」を視ること

郭

エリザベッタ・

ポルク

三原芳秋 〈翻訳〉の耐えられない不純さ

磯前順一 趣旨文

小特集「複数言語のはざままで日本を考える」

——エッセイ——

複数言語のはざまから日本と宗教学を考える
南燕 「バイリンガルな日本語文学」の将来性
伊東貴之 中国から見た複数言語と日本研究
山田奨治 自著を外国語にするということ

——センター通信——

林 正幸 日文研の地域連携活動より

出版編集室より

白石恵理 「紙の本」づくり

共同研究

基礎領域研究

彙報

所員活動一覧

76

66

64

47

44

41

36

28

20

15

10

3

2

エッセイ

小特集 「複数言語のはざままで日本を考える」

趣旨文

磯前 順一

日文研において行われる日本研究を国際的な文脈に移し替えていくことは、海外の研究者にとっても、国内の研究者にとっても大切な使命のように思われます。しかし、海外と違って、それぞれの国によって文化も社会事情も異なります。そうした複数の国々の間で、私たちは日本研究をどのように研究したり表現したりしてきたのでしょうか。あるいはこれからどのようにしていったらよいのでしょうか。その課題は、今日の翻訳研究やポストコロニアル研究とも大きく重なります。また、三言語以上の複数言語を操ることが当然となっているヨーロッパの学界や、日本語を習得しなければ、自国の近代のことを学ぶことのできない場合もあるアジアの旧植民地での文脈は、英語のみをもって国際言語とする状況とはずいぶん異なるように思われます。そのあたりをみなさんのご協力を得て、考えていければと思います。

日文研では「モノグラフ」の出版によって、英語圏に発信をしています。しかし、英語圏と

いうのは英国と米国だけでなく、もっと広い読者層の獲得を意味します。そして、所長裁量経費などで、別の言語での翻訳企画の支援もしております。あるいは客員研究員の方の中には、四言語以上の言葉に通じている方もいらっしゃいます。そうした方々のご協力を得て、それぞれのご経験を踏まえた興味深いエッセイをここに掲載することが出来ました。味読頂けましたら、幸いです。

(国際日本文化研究センター准教授)

〈翻訳〉の耐えられない不純さ

三原 芳秋

思えば、日文研との〈コンタクト〉は、いつも「複数言語のはざま」にあったような気がします。最初に桂坂を登ったのは、磯前順一さんが主催した大規模な国際会議「京都学派と『近代の超克』―近代性、帝国、普遍性」における同時通訳を依頼されたときでした(『日文研叢書 四七』に結実した国際会議です)。国連安保理のような立派な会議室を見下ろす同時通訳ブースに二日間監禁され、英語と日本語の〈はざま〉で自分の主体性が喪失していく、という壮絶な体験をしました。二度目は「木曜セミナー」で、堀まどかさんの野口米次郎論へのゲスト・コメンテーターとして、お呼ばれしました(堀さんによる報告文が『日文研』五一号に

載っています)。野口米次郎「ヨネ・ノグチは、いうまでもなく「複数言語のはざま」を生きさせた「二重国籍」詩人で、詳しくは堀さんの大著を紐解いていただければよいと思いますが、その日も、外国人研究者の方が日本語で質問を始めておいて途中で英語に切り替える（どちらも「母語」ではないのでしょうか）というような場面がありました。その後、縁あって昨年度より、稲賀繁美さんの共同研究班にysteしていたくようになり、こちらは「海賊船団」ですから、定義からして「へはさま」で悪戯をする集団」なわけです。学務多忙につきなかなか研究会に参加できず、なぜか飲み会にだけ出没する幽霊班員（幽霊船？）のような存在だったので、夏期休暇中に研究会を一回任せていただいた際に、「人文学の生態学的転回のために」と題して、さまざまな分野の友人を集めてミニ・シンポを主催させていただきました。人類学者が「ペルソナ」を、言語学者が「人称」を、文学理論家が「擬人法」を、哲学者が「人格」を、コミュニケーション学者がマルチモーダルな「自己」を語る……つまり「環境（環世界）」における「Person」について、それぞれがそれぞれの（学問）言語で語り合うという、これもある意味で「複数言語のはざま」を具現化したような、言ってみれば海賊船に乗りこんで「不純異分野交流」をやってしまった感じです。もともと「よそさん」のわたしは、ご多分にもれず、日文研というと、「国粹」とまではいかずとも「純粹」を奉ずる組織に違いない、という偏見を持っていたわけですが、少なくともわたし自身の〈コンタクト〉からみるに、そこそこ〈不純〉なところのようです。

さて、「国際的とはなにか―複数言語で日本を思考することとは？」という御題をいただいております。とくに、翻訳論・ポストコロニアル研究の観点から、という但書つきで。「翻訳論」といっても、もちろん翻訳実践の技術的な話ではなく〈理論〉的な方面から書きたいと思

うのですが、理論的・思想的「翻訳論」として、間違いなく「乗り越え不可能」な地点を示したのは、ユダヤ系のベルリン市民で三〇歳になるかならないかという若者が書いた「翻訳者の使命」(一九二三)というエッセイです(『ペンヤミン・コレクション』(二))。ちくま学芸文庫所収)。なにが「乗り越え不可能」なのかというと、これが「翻訳論」であるにもかかわらず、「言語Aから言語Bへの翻訳」といった個別的な場面トボスには目もくれず、「メシア的終末」において「諸言語が互いに補完しあうもろもろの志向の総体によってのみ到達しうる」という、えたいの知れない「純粹言語(die reine Sprache)」なるものに準拠した立論であるために、それを「オカルト的」として却下するか、さもなければ、その(ヴァーチャルな)「一性」≡〈全体性〉を丸ごと鵜呑みにする(または、まるごと鵜呑みにされる)しかないのです。ただ、そこまで大仰にかまえずとも、「純粹言語」なるものを措定することによる実地的な「効用」を考えてみることもできるでしょう。もしも、〈純粹〉な言語が唯一のものであり、「メシア的終末」に至るまではけっして全面的には現実化(actualize)しない潜在的(virtual)な〈全体性〉であるのならば、現実存在する「言語A」やら「言語B」やはすべて〈不純〉だということになります——〈不純〉という言葉いまわしに抵抗があるならば、「あらゆる〈純粹〉性の主張(虚構)に抵抗する」と言ってもいいでしょう。いかなる言語も、他者との関係なしに〈純粹〉な自律的アイデンティティを持つことにはない——つまり、「全ては関係性のうちに」ということです。そうすると、〈純粹〉な原作と〈不純〉な翻訳」といったクリシェを疑問視することができるようになる、という効用があります。

「日本(語)」が世界に誇るべき平和憲法やノーベル賞作家の小説を「翻訳のような文章」

といって貶す粗暴な人をしばしば見かけますが、これも、あまりに素朴な〈純粹〉性への信仰にもとづくクリシエにすぎない、と言えるでしょう。小説を書くための準備として外国語のテキストを読む習慣があるという大江健三郎は、「外国語と日本語との間を自分で往復する。そうやって言葉の往復、感受性の往復、知的なものの往復を味わい続ける作業が、とくに若い人間に新しい文体をもたらす、と私は考えています」（『読む人間』）と書いています。偉大なテキストはつねに外国語で書かれたようだ、とブルーストも言っていますし、小林秀雄が西田幾多郎の「日本語では書かれて居らず、勿論外国語でも書かれてはいないという奇怪なシステム」（『学者と官僚』）について語った際にも、そこには老哲学者の「悪戦苦闘」への深い畏敬の念（および文体模写するエピゴーネンたちへの蔑視）があったことに疑いはありません。また、ドイツ民族のための国粹主義的アンソロジー制作に際して助言を求められたゲーテが、そこに翻訳詩を含めるよう提案した話は有名ですが、かの折口信夫（釈迦空）ですら、ある種の転換期における翻訳詩の文体的重要性を強調していた（『詩語としての日本語』）ことも忘れてはなりません。

ベンヤミンの比喻で言えば、原作も翻訳もともに、「〔純粹言語〕という」ひとつの器の「破片」であって、ちょうど考古学者が発掘した破片を嵌め合わせて縄文土器を〈復元〉するように、原作と翻訳が「愛をもって細部に至るまで」協働することによって、けっして完全に〈復元〉することはない、しかしその分かえって無限のエネルギーを発しているかのような「ひとつの器」を、「志向 (Intention)」のうちに「救済」するのです。言語Aやら言語Bやらの〈純粹〉性という虚構を退け、むしろその〈不純〉さを耐え抜く (überstehen) ことによっ

て、あらゆる言語の〈不純〉きのなかに潜在する「純粹言語」の力 (potentia) を「解放」すること——これこそが、「翻訳者 (Übersetzer) の使命」ということになります。

言語や文化を語るとき、ことに「複数言語のはざま」で語るとき、わたしたちはしばしば、知らず識らずのうちに、この「純粹」性という虚構の甘い罠にはまってしまおうようです。留学先や国際会議の場において、外国語で「日本」について語るとき、よほど慎重にならない限り、ガヤトリ・スピヴァクの言う「悪しき人類学の仮定」すなわち「ある文化から来た者は皆、その文化の完璧な事例以外のなものでもないという仮定」(「翻訳の政治学」) から逃れることはむずかしいでしょう。つまり、「わたし」が「あなたがた異邦人」にたいして「日本語・文化」を「表象 || 代表 (represent) する」と言った瞬間に、〈純粹〉な「日本」(そして、「純粹」な日本のわたし) が現に存在する (present) という虚構が作動しているのです。「国際的」という発想にも、同様のカラクリがあるように思えてなりません。自律的で〈純粹〉な〈一〉としての「国民的なるもの (national)」が、一十一十……と足し算して「国際的 (inter-national)」となる。「国際的」に代わって(？) 昨今「グローバル、グローバル」と世間は喧しいようですが、同じような〈足し算〉式の発想では、これほどつまらないことはありません。むしろ、地球 (globe) という「ひとつの器」|| 〈全体性〉を措定して、そこではあらゆる「破片」が「複数・複合的 (multiple)」で「異他的 (heterogeneous)」、すなわち耐えがたいほどに〈不純〉である、という〈微分法〉式の(？) 発想の転換がなければ、意味がないように思えます。「複数言語のはざままで日本を考える」を、『日本』もまた、つねに・すでに〈複数的〉な〈はざま〉そのものである、と考える」に読みかえること。「一十一十……」ではなく、「一即多・一即他」。

〈翻訳 (translation)〉の場面とは、まさに、「純粋」性の「異」にもっとも陥りやすい難所であるにもかかわらず／であるからこそ、この「発想の転換 (transformation)」をもっとも先鋭的に行うことができる「穴場」であるとも言えるでしょう。「言語Aから言語Bへの翻訳」——もはや「言語」を「文化」に置き換えても良いでしょう——と言われると、堅固な城壁に護られた城塞都市 (Burg) Aから別の城塞都市Bへと書簡 (letters ≡ 文字) を届ける、白馬にまたがった「国王の使節」といったイメージを持たれるかもしれませんが、ところが、ベンヤミンが持ち出す比喻は、「奥深い森 (Bergwald)」なのです——田園都市に造成される森林公園といったものではなくて、粘菌から祖壺まで魑魅魍魎が曼荼羅をなす「縄文の森」。しかも、ベンヤミンの〈翻訳者〉は、その「奥深い森」の内部に安住するのではなく、森の縁に立ち、外部から、そのどこまでも深い森の奥を凝視し、どこからともなく鳴り響いてくる（「純粋言語」の）「こだま (Widerhall)」に聴き耳を立てています。「こだま」に〈起源 (Origin)〉はなく——それは、いつも、反復 (wider) なのですから——あるのは、いつのまにかの（複数・複合的な）〈始まり (beginnings)〉ばかりです (Origin と beginnings とは対概念は、「ポストコロニアル思想家」と名指される以前のエドワード・サイードが、自らの思想のために見出した〈始まり〉のトポス≡トピカです)。

「日本」を堅固な城壁で囲んで〈純化〉したうえで使節団を各地に派遣するのではなく、境界石もおかれていない「奥深い森」の「縁」で有象無象が〈不純〉な〈コンタクト〉を企てる——「日本」をも「異邦」とみなし、「異邦の [fremde] 言語の内部に呪縛されているあの純粋言語」を「救済する」という〈翻訳〉の希望に貫かれながら——そんな「コンタクト・ゾーン」としての「日文研」であってほしい……と、「よそさん」のわたしが、まことにおこがま

しい限りではありますが、わずかながらの日文研との〈コンタクト〉の経験から来る期待をこめて、そう述べさせていただきます。

補注：「コンタクト・ゾーン」とは、メアリ・ルイズ・プラットが（未邦訳の）著書 *Imperial Eyes* (1992, 2008) において展開した概念で、「異文化間交渉（衝突・交流など）」を考える際に、それら「異文化」が、出会う以前からすでに確固たる自律的な〈主体〉を有していると想定する従来のモデルから、むしろ「コンタクト・ゾーン」という場トポス面において、そこで生じた〈コンタクト〉という事象の結果として、〈主体〉なるものが構築されるというモデルへと、発想の転換をうながすものです。キーワードは *transculturation* という専門用語ですが、本エッセイでわたしが描こうとした「〈翻訳 (translation)〉の理念」へと「翻訳」していただいても、けっこうかと思えます。ちなみに、プラット当該書の舞台は西洋人が奥深くまで入りこんできた南米ですが、「日本」についてなら、奄美から列島を眺める島尾敏雄が幻視し谷川健一や岡本恵徳が論じた「ヤポネシア」の視点や、日露ふたつの帝国という万力によって締め上げられた「アイヌモシリ」と呼ばれる大地ツインに身を置くテッサ・モーリス・鈴木『辺境から眺める』（みすず書房）視点、ほかにも、海民たちのダイナミックな移動・交流から環「日本海」世界を描く網野善彦らの「日本」史——それを言うなら、ナマコの眼で眺め、エビスの耳で聴く「日本」だってある——などが参考になるでしょうか。わたしが比較的詳しい「ヨーロッパ」で言えば、たとえば、一二・三世紀のトレド（カステイリヤ王国）やパレルモ（シチリア王国）が好例で、文明の〈はざま〉に位置するこれらの地域は、世界史的・地政学的偶然により、先進的なイスラーム文明と後進地域「ヨーロッパ」との奇跡的なまでに豊饒なヘコ

ンタクト〕が生じる場となり、アラビア語によって保存・発展せられた（「ヨーロッパの（起源）」とされる）古代ギリシャ発祥の諸学——といっても、そのほとんどがイオニア植民地（現在のトルコ）という「コンタクト・ゾーン」に（始まり）を有するのですが——をラテン語に移す「翻訳センター」が営まれることになりました。そこは、異教徒にも寛容なイスラームの知識人たち、必死にアラビア語を学ぶ進取の気性に富んだキリスト教の学徒たち（今日でいえば「グローバル人材」でしょうか？）、そして、就中ユダヤ教徒ほかの故国喪失者（*exile*）たちが、ところせましと活躍していた——まさに「コンタクト・ゾーン」そのものだったのです。

（同志社大学准教授）

ヨーロッパの多言語的アプローチ 複数言語のはざまから日本と宗教学を考える

エリザベッタ・ポルク

私はマルチリンガルな環境で育った研究者です。大学教育はイタリアで受け、イギリス、スペインで勉強を継続し、ドイツ、インドに留学し、ドイツのマールブルク大学で宗教学（日本宗教）の博士号を取得しました。その間、イタリア語、ドイツ語、英語の教員国家資格を取

り、イタリア、オーストリア、ドイツで語学の講師をしながら、国際的アプローチや異文化交流を学びました。そしてその後、日本、ドイツ、ハワイの大学教員として、日本宗教とその社会的・文化的意義に関する講義を受けもってきました。

研究者としては、国際宗教学宗教学会（IAHR）の綱領に基づく宗教学（ドイツ語：Religionswissenschaft、英語：Religious Studies、あるいは the Academic Study of Religions、イタリア語：Storia delle religioni）の視点から、いろいろな宗教現象を分析しています。IAHRの研究者は、方法論はそれぞれ違いますが、「IAHRは特定の主義、信条、宗教を奨励するためのフォーラムではない」という原則は共有しています。私は、宗教学は特定の宗教の振興のためにあるのではなく、一つの学問分野として、どの宗教現象の分析や説明も、反証に対して常にオープンでなければならないというIAHRの方針に則りながら研究及び教育を行ってきました。つまり、宗教現象を、いかなる偏向をも排して、歴史的、経験的データとして分析し、社会科学の方法論を適用するなど、学際的に考察していこうとするアプローチをとってきたのです。

これまで私は、主に現代社会における日本の宗教、特に仏教と日本の文化・社会の関係、宗教的表象、日本の宗教とメディア、そして世俗社会・共同体との関係に研究の焦点をあててきました。また宗教と文明・文化の関係をよりよく理解するために、欧米と日本で宗教がどのようにに表象され受容されているかについての比較研究にも重点的に取り組んできました。

教育においても、私は、こうした学問的客観性と、社会・文化との関連を通じて検証していく方法論を重視し、宗教学の最新の分析ツールを紹介したり、比較という視点を導入しながら、様々な宗教、及び宗教現象を分析し説明しています。さらに、宗教とメディア、宗教と現

代社会・政治・経済・文化の関係、ジェンダー、ポスト・コロニアリズム、グローバル化、世俗化といった今日的イシューとの関わりについての説明や議論も必要だと考えています。学生たちに、人文学と宗教学を、今の具体的な文脈の中で、現実に即しながら学んでもらいたいというのがその趣旨です。

学生の関心をかき立て、授業で扱うテーマと社会的・文化的現実を関連づけるために、視聴覚資料を積極的に使用しています。宗教学の研究でもフィールドワークは大切だと思いますので、その方法的なツールも学生たちに提供しています。また外国語学習の重要性も強調しています。外国語ができるようになると、視野が広がり、他文化の理解を深めることができますし、また自分の将来の研究や職業上の可能性を高めてくれます。

世界の各地で戦争が起こり、ともすると宗教についての偏見が持たれやすくなっています。が、そうした状況の中で、宗教学者は、様々な宗教的伝統についての公正で正確な情報を提供するという重要な任務を担っていると思います。冒頭に述べたように、私は長年にわたり国際的アプローチや異文化交流の経験を積んできましたので、それらを活かし、学生たちが、宗教的伝統についてのステレオタイプに囚われることなく、真なる理解にたどりつくよう促しています。教育においても研究においても、こうした努力を今後とも続けていくつもりです。

日本学をマルチリンガルの視点から研究、教育することは、知的刺激に富む豊かな経験をもたらしてくれます。別に日本学や宗教学に限りません。マルチリンガルの視点というのは、他の地域研究、他の学問分野にも応用できるものだと思います。ステレオタイプにはまり込んでしまったり、平板な西洋（ヨーロッパ）中心主義に陥ったりしなくて済むようになるのもその功徳の一つでしょう。

言うまでもありませんが、日本に関連したテーマを扱う研究者は、日本語をよく知っていることが大切です。特に日本研究を志す人は、日本語研究を二次の問題と考えるべきではないと思います。日本人研究者とコミュニケーションを交わし、創造的な意見交換ができるようになれば、相互理解を増進させ、研究の水準を高めていくことができます。

このことは地域研究一般にも敷衍できるでしょう。地域研究において当該地域の言語を知らないまま二次的（大半が英語の）資料にのみ依存するのは、研究を大きく制限されたものにしてしまいかねません。研究対象の地域の研究者や住民とのコミュニケーションができなくてはバランスのとれた研究にはなりませんし、悪くすると、社会現象の解釈を誤ってしまい、とんでもない誤解に導かれるおそれさえあります。

特に（旧）植民地について研究する際には、霸権的な（宗主国の）文化圏の言語だけで研究を行うことには大きな問題があります。研究が一方的な見方に陥る危険性が高く、現にそれは今日でもあちこちで目につく弊風です。こうした不正さはただ学問分野に留まりません。支配的な文化が、自分たちの見方を他文化に押しつけてくるのは、経済的・政治的国際関係にも見られ、現在の南北格差、中心と周縁の格差は歴然としています。私自身、「南」に属する周縁の地のサルデーニャ島で生まれ育った人間であるため、権力と富からの疎外、文化的な押しつけとアイデンティティの悩みといった問題に特に敏感なのかもしれません。

しかし一方で、「島」育ちにはいい面もあります。他文化を理解しようとする際に、支配的なアプローチにばかり依存することを警戒し、現地言語を習い、現地の観点から文化を知ろうとする動機に親しいということです。私が日本研究を始めたときにもそうした動機が働きました。私は当時の日本研究の中に、オリエンタリズムやオクシデンタリズムという還元主義

的、本質主義的な方法論が支配的であることを感知し、それが日本文化や日本の宗教に対して歪んだ解釈を生んでいるという印象を持ちました。たとえば、仏教が西洋（欧米）に伝えられるときに、重要な仏教の宗派、特に浄土真宗が不当に矮小化されてきたことなどその一例です。

日本研究を重ねていくにつれ、私の関心は広がっていき、今は日本の地域社会における宗教と世俗の問題、日本の宗教とポピュラー・カルチャーの関連といったテーマを中心に研究を行っています。しかし私の研究方法は以前と変わりません。日本語の一次資料にあたること、フィールドワークを欠かさないこと、そして多言語の参考文献を参照することを励行しています。私はこうした多文化的、多言語的な研究方法を含む、多様な視点から物事を見て考えるところから、学問の世界の内外を問わず、私たちをよい方向に向けてくれる力になると強く信じています。地球規模での交流が急速に活発化し、地域間の境界線が統合されたり、曖昧になったり、消失しつつある現在の世界にあって、それは日本研究ばかりでなく、世界をよりよく理解するための大きな力となってくれはるはずで

（国際日本文化研究センター外国人研究員）

「バイリンガルな日本語文学」の将来性

郭 南 燕

バイリンガルといえは、二つ（以上）の言語を完璧に使えることを意味する言葉だろうと思ってきたが、間違いだった。

バイリンガルに関する研究書をひもといたら、二つの言語を話す、聞く、読む、書くという四技能を完璧に持つ人は非常に少数だ。むしろ四技能をうまく使い分けることができるかどうか、バイリンガルを決める標準だと見なされている。その基準に従えば、世界の半分以上の人口は、方言を含めて二つの言語を使えるバイリンガルだと推定されている。日本でも多くの人々はバイリンガルだろう。

それなら、私なんかもバイリンガルの行列に入れそうだ。頭の中ではいくつかの言葉がいつも混在している。第一言語となる二つの方言（北京語、上海語）、第二言語の日本語、第三言語の英語。しかし、習得した言葉の数は誇るに値するものは何もない。むしろそれらの言葉を使って世界とどのように関わっているかを考えることが大切だと思う。過去数年、私がつと関心をもっているのは、外国人が日本語を使って文学創作をすることは何を意味しているのかを模索することだ。

日本語は、現在世界の一二の使用言語の中で、九番目の使用人数（日本の人口数に相当）をもっている。日本語は和語、漢語、欧語の交雑によって構成された（雑種的）な言語だとい

えよう。外国人で日本語の新聞雑誌、文学書を理解できる人は約二百万人いるだろうと推測できる。日本語の四技能を完璧に近いレベルで持つ外国人も少なくない。近年、外国人が日本語を使って文学を創作し、多くの文学賞を受賞していることが注目されている。たとえば、

リービ英雄…野間文芸新人賞（一九九二年）、大佛次郎賞（二〇〇五年）、伊藤整文学賞（〇九年）
年）

アレックス・カー…新潮学芸賞（一九九四年）
デビッド・ゾペティ…すばる文学賞（一九九六年）、日本エッセイスト・クラブ賞（二〇〇二年）
年）

アーサー・ビナード…中原中也賞（二〇〇一年）、講談社エッセイ賞（〇五年）、日本絵本賞（〇七年）、山本健吉文学賞（〇八年）、講談社出版文化賞絵本賞（一三年）、産経児童

出版文化賞（一三年）

田原…留学生文学賞（旧ボヤン賞…二〇〇一年）、H氏賞（二〇〇年）
シリル・ネザマフィ…留学生文学賞（二〇〇六年）、文学界新人賞（〇九年）
楊逸…文学界新人賞（二〇〇七年）、芥川賞（〇八年）

このリストをみれば、これらの作家が日本の文化に与えた貢献が大きいたことが分かる。これは研究する価値のある現象だと思った。同僚鈴木貞美さんと稲賀繁美さんにアドバイスをいただきたいながら、シンポジウム「日本語で書く…文学創作の喜びと苦しみ」（二〇一〇年一月）と「日本語で書く…非母語文学の成立」（二二年一月）を開催した。研究者が発表すると同時に、七人の作家を招待して、創作観を披露していただいた。

田原氏（中国）は、日本語の不自由さに縛られながら羽ばたこうとする創作の苦しみと喜び

を語った。シリル・ネザマフィ氏（イラン）は、言葉の違いがあっても、想像の世界を駆け巡る自由度は同じだと強調している。ポヤンヒシグ氏（中国・内モンゴル）は、数少ない日本語の語彙を重宝しながら、詩情を展開させる経験を教えてくれた。楊天曦氏（中国）は、日本文学の伝統に馴染みながら、新しい要素を持ちこもうとしている。リービ英雄氏（米国）は、音声に対する鋭敏な感受性と言語権に対する主張を合わせている。アーサー・ビナード氏（米国）は、物事の真実をつき、駄洒落の力で日本語の魅力を引き出す話が印象的だ。温又柔氏（台湾）は、台湾語と日本語に育まれた感性を生かす創作が新鮮なものばかりだ。

これらの発言を聞いていううちに、彼らの文学を「バイリンガル」という概念は、書き手は「日本人」でなくともよいこと、日本語は母語ではなくともよいこと、日本語で書くことには言語的、芸術的、社会的、経済的、政治的な選択があったこと、外からの視点で日本語と日本文化を観察し解釈していること、独自の日本語の運用法があること、多言語・多文化の影響が投影されていること、また日本の植民地統治によって祖先の言葉を奪われた苦渋があらわれていることなどを意味している。

シンポジウムで聞いた作家たちの発言と研究者たちの論文を集めて、『バイリンガルな日本文学・多言語多文化のあいだ』という論文集を作ることにした。同僚磯前順一さん、稲賀繁美さん、白石恵理さんに助けられ、所長裁量経費の助成をいただいて、二〇一三年六月に三元社から出版することができた。作家六人の創作談と研究者十八人の論文とコラムが一堂にあつまると盛観を呈する本となった。

内容は四部に分けている。「第一部 外国人の日本語文学」「第二部 作家たちの発言」「第

三部 植民地遺産から生まれた日本語文学」「第四部 母語と非母語を超える」だ。取り上げられた文学は、創作の時代は二十世紀十年代から二十一世紀十年代まで跨がり、作品の舞台は日本、朝鮮半島、台湾、香港、中国、イラン、インド、アメリカ、ブラジル、アルゼンチン、ヨーロッパ諸国、と世界的規模をもつ。作品の形式は小説、随筆、詩、和歌、俳句、演劇などがあり、内容は、文学、言語、歴史、社会、法律、思想、映像、音響、ジェンダー、環境、経済、戦争などの角度から分析されなければならないほど豊富なものだ。

これらの作家たちは、日本人を主な読者として想定して日本語で書いたことは大きな意味がある。つまり、日本語で身体感覚と心理活動を繊細に折り込み、読者の心を打ち、美意識に訴え、共感を呼ぶように工夫しなければならぬ。使い慣れていない言葉による創作は決して簡単ではない。ポヤンヒング、田原、楊逸、シリ・ネザマフィの諸作家はこのような困難に言及している。にもかかわらず、作家たちは、母語の影響の濃い日本語をもって、日本語話者の描写できない世界を作りだしている。また、作中の主人公たちの母語と母語文化がいかに日本語と日本文化と拮抗したり、溶けあったりしているかに関する描写が、彼らの文学の一部となっている。

日本語文学を鑑賞する楽しみの一つは、日本語と日本文化に持込まれた新しい要素を見つけることだ。見慣れていない、聞き慣れていない表現は従来の表現よりも、物事の新しい側面を瞬間的に見せてくれることが多い。言語の発展においては、新しい表現はだいたい驚き、首肯、共有、継承という段階を経ていると思われる。また、作家たちの行う文化比較によって、当たり前と思ってきた日本の文化的現象は、外からみれば、不思議なものだと教えられてハッとして、日本文化を新しく認識するようになることが多々ある。

たとえば、ビナードは、高速道路に近いマンションに住んでいる自分は、「体内にためている音のかんりの部分が騒音」だと表現している。溜まるはずのない音波に関する非常に適切で目を奪うような表現だ。騒音が人間に与えた影響の深刻さをすぐ想像させ、読者の共鳴を呼ぶ。

また、ボヤンヒングは、「日本のどこへ行っても、時計がよく見られる」が、モンゴル語は「時間」「時計」「時代」「季節」を「チャグ」のひとことで大雑把に表しているため、「モンゴル人の顔からは永遠は見られるが、瞬間はほとんど見られない。日本人の顔からは瞬間がキラキラと目につく」と表現している。この書き方は、多くの日本人が時間に几帳面で、性格がせっかちだという特徴を示してくれる。このような示し方が正しいかどうかは問題ではない。重要なのはその表現が美しく、読者の意表をつき、日本人の性格の一面を目立たせてくれることだ。

バイリンガルな人々の日本語で創作した文学作品を通して、日本語と日本文化を考え直すことが日本人に要求される時代に来ていると思う。バイリンガル性は、言語と文化を豊かにする可能性をも意味している。

「バイリンガルな日本語文学」はこれからどこへ向かうだろう。書き手が外国人かどうか、使用言語は母語かどうか、ということを基準にするのではなく、むしろ作品には言語的、文化的多義性があるかどうかを検討することこそが究極の目的だと思う。そうすると、日本人作家の作品もこのカテゴリーの中に入れられるものが多いだろうと思われる。言語的、文化的多義性をもつ作品を作っているなら、「バイリンガルな作家」と呼ばれてよいだろうと思う。

(国際日本文化研究センター准教授)

中国から見た複数言語と日本研究

伊 東 貴 之

中国、更には、台湾を含む中国語圏における日本研究には、取り分け、日中国交回復後、かなりの蓄積があることは、論を俟たない。

まず、中国では、日文研とも何かと御縁の深い、北京日本学研究中心（センター）が最も有名であろう。夙に御高承の向きも多いかと思われるが、同・センターは、中国における日本語・日本研究の拠点として、また、日本との交流に携わる各分野の人材の養成を目的として、一九七九年、当時の大平正芳首相と華国鋒首相の合意により、翌八〇年に設立された日本語研修センター（通称・大平学校）の後継機関として、一九八五年に中国教育部（日本の文科省に相当）と日本の国際交流基金（ジャパンファウンデーション）との協議により開設されたもので、現在では、北京外国語大学に日本語学・日本文学・日本文化・日本社会・日本経済などを研究・教育する、総合的な大学院の修士課程・博士課程が設置されているほか、北京大学においても、主として、社会科学系の博士課程学生を対象とする講座が開講されている。何れも、適宜、日本人研究者を教授陣として一定期間、招聘したり、資料の収集や文献調査のために、学生たちが来日して研究する機会を設けたりしている。

北京日本学研究中心の学生たちは、日本語がきわめて堪能なことでもよく知られており、また、研究者や中国国内各地の日本語教師のみならず、官公庁や企業などで、実務に携わる若手

幹部の養成にも力を注いできた経緯もあって、日本側の協力とも相俟って、何れにしても、往事の日中友好的なムードや政策の反映であり、結実でもあるという側面が強い。

また、専門的な日本研究という点では、むしろ歴史も長いのは、周恩来首相のほか、ノーベル物理学賞の受賞者・李政道（リー・ジョンダオ）教授や楊振寧（ヤン・チェンニン）教授らの母校としても名高い、天津の南開大学であり、就中、同大に附設された日本研究院を逸してはならないであろう。同院は、夙に一九六〇年代より、同大の歴史研究所・日本史研究室、次いで、日本研究中心（センター）などを母体として、大学院レベルでは、中国国内で最も早くから研究・教育を展開しており、歴史、政治・外交、経済、思想・文化、社会・教育など、中国における人文系諸分野の日本研究のメッカとして有名である。日本語での著述も多い、日本史・日本思想史の故・王家驊（ワン・ジャーフア）教授など、著名な研究者を輩出している。

その他、現在では、中国社会科学学院、清華大学、復旦大学、香港中文大学、吉林大学、東北師範大学、山東大学、浙江大學、四川大學など、各地の大学や社会科学学院にも、日本研究の専攻や日本研究所が設置されるなど、制度的な整備の面でも、その進展には、著しいものがある。このうち、復旦大学の日本研究中心（センター）や歴史系の方々とは、日文研もつい先年、共催で第一八回・海外シンポジウム「江南文化と日本」（二〇一一年）を催したばかりである。

翻って、台湾の状況を概観するなら、やはり日本語・日本文学をはじめとする、日本研究の牙城としては、まず、教育・研究機関として、国立台湾大学・文學院の日本語文学系、他方、研究中心の機関としては、同じく台湾大学文學院に附設された日本研究中心（センター）や人文社会高等研究院に附属する日本・韓国研究平台（拠点・プラットフォーム）などが、代表的

な存在である。それぞれ先年、日文研の外国人客員研究員として滞在された、徐興慶（シュー・シンチン）教授が、その中心的なメンバーとして、研究・教育をリードされ、また、その設立にも携わってこられた経緯がある。

特に台湾大学・文学院の日本語文学系の場合、通常、多くの中国や台湾の大学の場合がそうであるように、外国語文学系の下位の組織ではなく、中国語文学系、外国語文学系、歴史学系、哲学系などと並列する専攻として、位置づけられていることが特筆されよう。京都大学から移籍された、日本思想史・教育思想史の辻本雅史教授をはじめ、数名の日本人スタッフも擁している。また、日本研究中心（センター）や人文社会高等研究院などは、取り分け、近年、さまざまなシンポジウムや出版活動を通じて、世界的なレベルでも、日本研究を牽引する存在となっている。

この他にも、教育機関としては、国立大学では、政治大学外国語文学院・日本語文学系、私立大学では、淡江大学外国語文学院・日本語文学系など、研究中心の機関として、国立中山大学・日本研究中心、輔仁大学外語学院・日本研究中心、淡江大学日本研究中心など、また、むしろ国際関係や社会科学系に重点を置く研究機関として、中華経済研究院・日本中心などがある。台湾大学と並ぶ、アカデミズムの牙城、中央研究院の亚太区域（アジア・太平洋地域）研究専題中心も、同様の傾向が見られるが、此方は、日本プロバターの研究所ではなく、目下、やはり日文研とも御縁の深い、中央研究院・近代史研究所の黄自進（フワン・ツーチン）教授らが中心となって、日本語プロバターの研究所を中央研究院のなかに設置すべく、尽力されている。まさに、こうした日本語教育や日本研究の蓄積の上に、現在、中国や台湾では、日本の同時代の文学作品や学術書なども、陸続と翻訳され、上梓されるに至っている。詳細は、曾て別稿

においても論じたところであるが（―拙稿「中国、モンゴルで『文学』を―カデンツァ風」、『國文學 解釈と教材の研究』第四七巻・第一〇号、學燈社、二〇〇二年八月号）、いわゆる村上春樹現象などに象徴されるように、取り分け、村上作品に関しては、殆どリアルタイムでの受容や享受が、海峽兩岸、ないしは、兩岸三地などと呼ばれる、大陸・台湾・香港を含む、中国語圏の全域で、広く深く滲透しているさまが見て取れる。

また、日本の中国研究など、学術書の翻訳出版という点では、大陸の方が、やや先んじているように見受けられる。特に江蘇人民出版社の海外中国研究叢書というシリーズが、英語圏を中心とする欧米の第一線の中国学の成果とともに、島田虔次、溝口雄三、斯波義信、吉川忠夫、濱下武志の諸氏ら、戦後日本の歴史学を中心とした中国研究の良質な達成を広く翻訳・紹介している。その他、中国での現代日本の学術書の翻訳・紹介の状況は、人文・社会科学に限ってみても、丸山眞男、廣松渉から、子安宣邦、蓮實重彦、柄谷行人など、中国学に止まらない広汎な裾がりを示している。

翻って、文学作品の翻訳では、島田雅彦、川上弘美、小川洋子の諸氏ら、中堅作家の作品から、ミステリーや歴史小説・時代小説の分野など、むしろ台湾の方が、日本語の読者層の厚みを感じさせる翻訳・紹介ぶりが注目される。他方、現代中国において、ほぼ完璧に近い全集や著作集が刊行されている作家として、上述した村上春樹のほか、中国を題材とした作品の多い井上靖やノーベル賞作家の大江健三郎などに加えて、何と渡辺淳一が挙げられるが、存外、彼の人気が高いこと、更には、谷崎や川端などの日本的な美意識の伝統を継ぐ作家として紹介され、喧伝されていることなどは、御愛敬とでも言うべきか。

それでは、こうした翻訳・紹介にも、如実に反映されている如く、中国や台湾における日本

語教育、日本研究は、日々隆盛を極めていると、手放しで言祝ぐべき状況にあるのであろうか？―残念ながら、それを肯うには、些か遠く、むしろ懷疑や躊躇の念が、萌さざるを得ないのが現状であろう。

何も短い時間的なスパンでの、日中関係の齟齬や軋轢といったことだけが、問題なのではない。無論、現状のような事態が長引くなら、お互いの学術・文化の交流や日本学の進展にとつても、些か憂慮され、懸念される傾向が、深まる懼れも無しとしない。しかるに、取り敢えず、現時点までの中国なり、台湾なりの学界・アカデミズムや文壇・ジャーナリズムなどの趨勢を鑑みるに、取り分け近年、米国を中心とした欧米志向が一層深まり、日本の存在なり、日本の学術や文化の相対的な地位が、むしろ遁滅していることが、当面の問題なのである。上述したような、文学作品や人文・社会科学の翻訳・出版の盛況ぶりも、必ずしも日本研究の進展や深化の結果ばかりではなく、広く海外の学術や文化を紹介し、受容しようという意欲の現れの一環として、理解され、捉えられるべきであろう。何となれば、欧米の同時代の文学なり、ポスト・モダンの現代思想などの翻訳・紹介も、ある意味では、一層の隆盛ぶりを見せているとも言えるからである（―例えば、王前『中国が読んだ現代思想―サルトルからデリダ、シュミット、ロールズまで』、講談社選書メチエ、二〇一一、参照）。もつとも、社会科学や映画、サブカルチャーなどを視野に入れるなら、言うまでもなく、より大きな潮流は、文化的な意味でのアメリカン・グローバルイズムの席捲と見ることも出来る。

実際、聞くところでは、台湾においては、留学先による学閥的なグループ形成が見られ、曾ては、日本留学組が多数派であったのが、現在では、米国留学が主流化しつつあって、日本研究者としては、学術的な意味でも、そうした趨勢に対抗せざるを得ない状況に置かれている由

である。例えば、台湾の女性作家・李昂（リーアン）の作品（一例として、何れも国書刊行会から、邦訳もある『迷いの園』『自伝の小説』）などでは、戦中派の日本語・台湾語世代、戦後の北京語世代、そして英語世代とも言うべき、留学志向の孫の世代との葛藤などが、しばしば描かれているが、台湾の場合、より深いところでは、そうした世代間の言語的な断裂や社会変容の反映すらも、かかる事態の背景には、横たわっているのやも知れない。

さて、日本の存在感の相対的な低下という点では、憂慮すべきは、日本学のみならず、世界的な視野から見たとき、筆者が専門としている、中国学や中国研究、あるいは、東洋学の分野でも、同様の傾向が、かなり顕著に見受けられ、実感もされるところである。曾て日本の中国学、東洋学などは、「世界に冠たる」中国学、東洋学などとすら、呼称された時期さえある。インド学・仏教学の場合には、その近代化に当たって、ヨーロッパの言語学（サンスクリット学）などの多大な影響を受けた点で、やや異なるが、取り分け、中国学の場合、前近代以来の儒学・漢学の伝統に加えて、地政学的に見ても、さまざまな意味で、日本に有利な状況には事欠かなかった。戦後の長い期間にあっても、中国や台湾に比べて、日本の場合、大陸・台湾・欧米のそれぞれの中国研究に対して、比較的アクセスし易い状況下にあったことは、ある意味では、冷戦構造による、漁夫の利のような立場でもあった点は否めないものの、研究上からすれば、やはり僥倖と云うべきであつたらう。

しかるに、現在では、海峡兩岸の人的・学術的な交流の活発化はもとより、中国や台湾からも、米国を中心とする欧米留学が、かなり一般化している上に、特に戦後の米国における中国研究の進展、米国の中国学の国際的な擡頭といった事態とも相俟って、いわば日本の頭越しに、学術的な交流や人的な往来が行われるような傾向さえ、ごく普通に経験されるようになって

ている。

加えて、欧米の中国学、東洋学それ自体の変質という要因も大きい。欧米、特に米国において、歴史学部やアジア研究などの講座の中で、ポストや履修者の人数的にも、次第に日本学が占める割合が通減し、些か国策的な意味合いも含めて、中国研究やイスラーム地域研究へと緩やかなシフトが敷かれていることが、夙に指摘されている。それと同時に、曾てまさに日本の中国学や東洋学が、「世界に冠たる」と形容された時期には、欧米のアカデミズムにおいては、中国学を研究するために、そのツールとして、わざわざ日本語を学ぶということも、むしろ一般的ですらあった。フランスのパリ大学では、漢文訓読なども教授されていた由である。現在でも、そうした伝統の名残として、筆者の知る限りでも、米国の中国思想史の泰斗、ベンジャミン・エルマン教授やフランスの仏教学の第一人者である、フレデリック・ジラル教授のように、日本語に堪能な方も少なからず存在するが、年代的には、やや片よりが見受けられるのも事実であろう。

以上、縷説してきたような事態を反映して、筆者なども近年、特に痛感するのは、中国や台湾で開催される国際シンポジウムや学会などの場で使用される、いわば共通言語や使用言語の変遷である。開催国が何処であれ、中国学や中国研究の場合、中国語が第一言語であるのは、余りにも当然のことであるが、日本学がその対象ではないにも拘わらず、曾ては日本語での発表に通訳が付くほか、場合によっては、日本語も併用されることさえ、ごく日常的な風景であった。それが最近では、呻吟しながらでも、やはり中国語で報告せざるを得ないケースが多くなる一方で、英語での発表には、必ずしも通訳も付かず、恰も英語が第二公用語のような情景すら、珍しいものではなくなりつつある。これまた、より広い背景や情況としては、ビジネ

スの世界や留学生同士の間では、東アジア出身の人びと同士が、場合によっては、英語を共通言語として会話し合うようなケースが、一般化・日常化しつつあるといった、いわば英語グローバルイズム（帝国主義？）の世界化とも、一面で平仄が合う事態ではある。

結論としては、些か凡庸かも知れないが、日本学と中国学や東洋学とを問わず、日本人研究者としては、英語や中国語など、多言語での発信により一層、心懸けると同時に、やはり本来の研究それ自体の精度を高めて、日本の学術が世界的にも参照されるような体制作りにも、意を用いるべきかと考えられる。

その他、最後になるが、中国から見た複数言語ということでは、中国域内の少数民族言語に加えて、普通話（プートンファ）（標準語）に止まらない、中国語（漢語）自体の方言の多様性なども、重要な論点となろう（―なお、少数民族の言語や文学などについて、御関心の向きは、やはり前掲の拙稿を参看されたい）。筆者自身、前任校では、初級の中国語の教育にも携わったが、普通話（プートンファ）ばかりではなく、会話人口の多さからすれば、広東語なども、もっと教えられ、学ばれても良い、実用言語としても、文化人類学などにおいても、きわめて重要な言語である。また、アジア地域の言語という点では、特に日本の場合、教育・研究上の観点からは、逆に必ずしも中国語だけで、それを代表させる必然性もなく、韓国語（韓国・朝鮮語）やヴェトナム語、インドネシア語など、より多様な言語が学ばれることが、文化の多様性の維持や拡充という意味からも、望ましいことと思われる。

（国際日本文化研究センター教授）

「過程」を視ること——火星と御月様の舞いの春にちなんで——

マルクス・リュッターマン

執筆依頼の締め切りに向かっている四月、西にして大枝の奥斜面の地に片栗の花が反り、南にして夕空の木星と火星と月が舞芸を披露した。みごとに、再生する弥生の植物や赤い光の目と白く満ちた光の面が小さい人間の考えを導き、随筆の題材でも暗示しているかのように微笑み乍ら見下ろしてくれた。

私は今年度から日文研の文化資料企画室の仕事に携わるように頼まれ、職員と研究者の皆様と一緒に資料の公開方法やそれにかかわる技術的な要素（機械、ソフトウェア）と戦略を回想して参りたく、世の中で有力になったインターネットやIT産業による恵みの光と依存の影の間の当たりになっている。正直申し上げると、地球各所で同時に同様な研究対象をめぐって分析と解釈を繰り返す可能性に憧れる多くの人文科学者のように、小生もITは便利に活用したくても、最新技術の形態によって人間思考の自由と時間を奪いがちな一面の傾向は憚る。しかしながら、両域の依存関係は瞭然であり、研究所の仕組みには相互理解、尊重、保護が不可欠である。今後、広くまたは長期的な資料公開の底力を発揮するには、最新の情報技術を採用しながら無常の世が動いている過程に対応しなければならぬ。一方、IT技術に信頼できない人々も声をあげて、とりわけ人間ならではの連想力、倫理、意識と言語による思考を中心に先述の過程への対応を求めている。たとえば、このごろの翻訳ソフトウェアは数式的に描く範囲

では機能しても、人間言語、即ち文化の世界では不十分なばかりではなく、誤解と不和さえ招きかねない。

やはり、思いおこすに、古代ギリシヤ学問には二本の大柱が聳えている。研究者の間にプラトンの洞窟比喩を以て語られる「影」の認識論はその一本で、二本目はアリストテレスのアルケー（根源）をめぐる考察、これもまた動因論として知名度のもっとも高いものである。この両論はおそらくギリシヤ哲学の固有の産物ではなく、それに相当・類似する世界思想は萬あれども、先ずは原理的にこの二つ、想像と実像との関係及び要因と万物の根源との関係が人間の認識論ですぐれて注目されている。それでは、洞窟のお話と始動因のお話の関連について考えてみよう。

洞窟の比喩は、壁面に映る「影」が「事実そのもの」と見受けられる人間の日常的錯覚が主張される例え話である（『国家』第七卷）。影の芝居は背後にある別物によって動かされ、しかもそのアイデアを振り返ることのできない、縛られた人間の五感では見えない、という古代のメディア批判として解釈される。このごろ動画や絵画資料など、視覚で観察したからといって、「分かった」・「理解」と勘違いする短期性及び利那が蔓延しているが、勿論その「影」で準えるものは視覚的な観測にとどまらない。ソクラテス／プラトンが表面の裏に潜む徹底的なアイデア追求を知の境地といい、現在でいう「研究」が時空を超え、非物体的な・永遠の実在を探ろうとすることは通念であろう。文化を対象とする研究所もまた、このような理念をもてば、自然科学の本質と違わず、いわば肉眼ではいたらない、考察的な究めが期待される。

アリストテレスの形而上と訳される概念はじつは「上」というより、自然の諸存在を論じた「後」、若しくは「存在中」のものという意味であるが（『形而上学』第五卷第一章）、その議論

では移り変わる諸存在の動因、この世の作用しあう様をひろく説くところである。そしてアリストテレスは作用の動因を視るに、「始動因」があり、始動自体は非動的な性質をもっている。と提唱する。

この世の場所および時間を究める認識には「影」的作用と「始動因」に遡ると理解される作用とが後ほど一神教のユダヤ、キリスト、イスラムの各教理に影響したが、信仰の習合以前に立ち返ってみればすっきりするかも知れない。いずれにしても、「始動因」を追っても、宇宙の形成学から動物の進化学までその始めは見えてこないし、その目的地も見えない。歴史学者のドロイゼンがその『史学綱要』で、歴史学問は中途の連鎖しか把握しきれないのであると述べたように、作用から作用へと分析や解剖や解剖を繰り返すその業こそ研究という意味である。

肉眼で見えない種を見いだしてひらめくこと。見えない原動力を発見してこの世のひと齣でも理解すること。移り変わりの因果関係の一部、輪廻の一連を視野にいれること。認識論はこの識別に尽きると思われる。物理学でさえ、物質及びエネルギーというモデルをもって起動原理をのべつつも、その物質とエネルギーの間のもも導入し（たとえば光子）、しかしそもそも物質やエネルギーが何であるかは説明できない。言葉と想像を越える世界のようにあるが、見えない、一目では納得できない因果関係の地下流の一部分を解明し、見えるかの様に置き換えてみることを学問は目指しているのである。

宇宙の現在を知るには物質やエネルギー、陽子・中性子・電子をはじめとする某子、波及び線と呼ばれるものの成り立ちが研究されている。その発展上の形跡として視覚の範囲内外の宇宙にして光線、大気にして音が観測され、その波の長短によって物理学的に時間及び空間の拡大と入り交じり（歪み）が推測されている。物質に関しては、その構成の複雑さによって元素

表のコードで列記される積み重ねが露になり、星形成そのものもたらしめた物質が地球やその他の惑星の素材をはじめ、生物体内の鉄などに至るまで基礎素材となったことも知られている。地球ではまた、地層分析によって地球の天体としての成り立ちや地殻・気候の変容などが分かる。しかも、石炭・石油のように、過去の生命放射性の印が点在する場合には、炭素14比率、つまり半減期が五七三〇年であることをもって著明なC14年代測定もできる。生命の発展を把握するにあたって、遺物やその細菌などによる浸食と刻印を手がかりにして、形態的な分析を通じて、細胞、骨、四肢、羽、脳などのいわゆる進化が判明している。また、肉眼で見える形のもととなるコードは遺伝に刻まれ、気候と環境による変化に対応してきた過程が読み取れる。同様に、対面して交際する個人等も、その目の奥、その額の裏に来歴が記されている。大学生の生活、小中学校、高等学校の教育、竹馬や砂場の幼い頃に、母親の胎内に心の育成が遡るように、個人を知るにはその人の過去を解明しなければ、理解に繋がらない。教養や育成の分析と同様、治療も病歴の纏めから始まる。我々は対象がいかなるものであっても、原形を把握し、何等かの問いを掛けようとすれば、その背景知識として過去を調べる。個人のように集団もその過去には健全らしい要素と危惧を抱かせる要素とがあり、それらが現在に至る有様を文化という。現在の苦痛から脱皮せんと信仰や、冥想に期待する向きもあれば、文化学問に手がかりを求める動きもある。しかし念のために、学問は智慧や悟りの醍醐を保証せず、単に合理的な言葉による認識主張を矛盾のないように調和させようとする学識拡大プロセスであることを忘れてはならない。

中国語の概念を受けて、日本でも一般的にそのような背景を歴史といい、官僚（史）が記す年月という言葉を使うが、現代の歴史概念では学者が遺物を分析（解読と解釈）する作業をひ

ろく含むと言ってよい。現代の歴史概念には二つの特徴があることを注目したい。一つには、史料（遺物）として文字の言葉が伝わる時代のみが歴史と言われ、それ以前はいわゆる先史に過ぎないという見解である。すなわち人間には史とその先とがあるという。これは依然として有力な見方であるが、果たして有効な考察様式であるかは疑問である。もう一つの特徴はその人間を中心とする対象（人文科学）であるが、その相対化をめぐる議論の余地も甚だある感がある。歴史研究の対象として果たして人間にさほどの霊長らしい玉座を与えるべきなのか、それもまた八方で問い直されかけている。

しかし、学識の主体はとりもなおさず人間・人類の研究者達である。また、その主体の歴史を語る資料Ⅱ史料は儀礼、神話、衣食住などはあれども、そのいずれの意味についても遙かに細かい資料Ⅱ史料として言葉がある。言葉は心理の媒体であり、それが汲んできた過去の流れには豊富な情報が伝承されている。言葉を史的に研究する方法は多彩にあるが、いわゆる歴史学として定着している学問の独占ではない。医学、天文学などの自然科学、文学、言語学にはそれぞれの史的研究が認められる。私の意見では、それらを総合的に考察する研究が一般歴史学Ⅱ文化史学の役目である。文字が伝存されない場合、史的对象に欠けるということを理由に、言葉そのものが「史料」として歴史学から排除されそうだが、実は地名、人名、普通名詞、動詞、文法を「史料」にして、その構造的、復元的方法によって特定の問いへ特定の答えが可能になる。例えば、「神」という言葉の原意は後述の騎馬民族がもたらしたいわゆるアルタイ語系統の「シャーマンの聖職者」から変遷したように。

周知のように、雅楽では箏篋をはじめ、遊牧民の生活基盤に由来する楽器が登場する。高床式の建設は漁業生活を基盤とし、稲作農法と混ざって中国の南端から北上した。越國などの山

東半島周辺で稲作とともに蕎麦・麦の農作や玉石文化、養蚕業や北部の遊牧など多彩な民族に伝わる漁法や捕獲や農法と家畜の伝統が朝鮮半島に移動して、日本列島の主たる文化基盤の一つをなし、そしてさらに南下する騎馬民族の影響を受け、朝鮮半島と日本でその支配層の言葉がもう一つの文化基盤をなした。大まかにこのような民族混交を出発点にして、さらにアイヌ文化及び蝦夷の合成文化をはじめ、北方の肅慎（みしはせ）と南方の隼人という移民とが合流して日本文化が形成されてきた過去に、或は宗教思想或は生活道具、或は神話或は衣食住、或は言葉或は文字が多岐にわたって過去の源流に遡る。

贅言を費やしているとも思われよう。しかしこれらの史実はヨーロッパなどではあまりひろく知られていない。一因は西洋史以外の歴史に対する鈍感さ、また一つは西洋文化圏外の記号との深い隔絶感である。太平洋から北極圏まで相互の認識が鈍いのが普遍的だが、集団的自意識が不十分である事実とも絡み合っている。しかし実は今やそれぞれの文化の担い手は普く地球人間社会が主体で、同一の主体であるとの自覚が要請されているのだ。例えば、西洋人のみた日本史、日本人のみた西洋史といった古めかしい見方は、文化学専門家としての見方に変遷しつつある。いわゆる中近東から東西に分布した伝播が蛇行のあげくまた合流して大海になった現在。中国から東西に伝播したのも大海の共有物と化している。

そこで、史料を深く読む能力、比較を通じて人類史の遺産として位置づける資格、それを共有化させる役目は国籍を問わない。ところが、認識や考察を運ぶ言葉は未だそれぞれの別の言語圏に分かれている限り、その間で専門的な文化翻訳が必要である。研究者はこのような文化翻訳をふくめた仕事を果たしており、例えば、いわゆる日本学者もこの類に所属している。しかし、同時に日本の出版市場向けの作品も他言語に訳されている。こうした場合には、翻訳の

専門性に向けて、忠実性以外にいくつかの注意点がある。三点でもって纏めてみたい。

(い) 翻訳される言語圏における研究史(論文・単行書)に配慮して、それに対応して論ずる能力。たとえば鎌倉・室町時代の武家研究や法政史など、日本語史における万葉仮名における漢音の影響や、音便の変遷、偽物語りのようなパロディ文学などについていえば、案外に知られていない既往文献が存在している。このような文献は当該言語圏の研究者の間でも無視・軽視される可能性もあり、短期の滞在では研究史の全体像を到底掴めない。このような背景を無視して、日本語で出版された研究書を翻訳しようとしても、相互理解に至り難いばかりか、誤解の種にさえなりうる。概ね当該言語圏中の研究事情に応じた解説がのぞましい。

(ろ) 当該言語圏そのものの概念史、歴史用語、言語や暮らしの伝統を充分把握しないまま、日本の事情をのべる際、研究対象の特殊性、異質性が強調されすぎる恐れがある。例えば怨霊という言葉と概念とは欧州では知られていないというような主張。当該言語圏の研究者の間でさえ自ずからの概念伝承に疎いことからそれを無視・軽視することがある。それもまたその議論様式の高貴さ、分析の気鋭、学識の権威につながり、翻訳語の水準に反影している。

(は) 当該言語圏には固有な問題関心、関心構造、感性があり、また、知識未発達の域も、認識度の高い域もあるので、その有様への批判も含めて、対応する必然がある。

以上三点が学問的な公開法・伝達法の不可欠な要点である。即ち、各国の言語には日本文化を含めた人類史に関する洞窟壁面の「影」やアルケー(根源)の追求が共同に担われている。現在と未来は今こそ共同のものだからである。そこで現在、たとえば「日本側」と定義し(果たして一色の集団を指しうるかはさておく)、自己満足や自己への先入観、もしくは反省的思考も含めた自己認識と「自己理解」をも「発信」(ミッション)する仕事を我が役目や使命と

設定して、かかる各国における伝達法が果たされるだろうか。某社会、某文化における作用が解明される考察が個別の利害・私観にねづく「知ってほしい」という外交的な作業でいいのか。むしろ、インターネットにおいてこそ内外の壁を崩して、人類は共同に「知りたい」という認識論の上で意義をもっているという考えが研究者としての妥当な見解であろうか。日文研もその文化資料研究企画室をはじめ、資料公開と解釈をミッションに託すと言うよりはあくまでも控えめに「提供」すると言えば、姿が芳しく、響きもいいのではないか。人間社会がグローバルに入り組んで変化しつつある中で、その相互理解に努める学問は既に何百年の貢献をのこしている。各国に日本発祥の文化が世界的遺産として伝承されており、日本学者が歴史関係で日本語や英語を傍らに、フランス語、中国語などで論文や研究書を書いているなかで、当該語圏の概念や既往研究に配慮した執筆法をとることを通じて、その環境に応じて、その環境で尊崇しうる形にして日本語文化千五百年から出る答えを紹介している。こうして世の中全体の相対化と視野拡大に資している。

大枝の空の上で軌道を交差する天体を視れば視るほど、たとえ刹那に世上の注目を引かずとも知識人としての議論をもって新しい人類史認識を生み出す可能性に力を注ぎ、国際的な「過程」を見きわめる日文研の行方が期待されてならない。

(国際日本文化研究センター准教授)

自著を外国語にするということ

山田 奨 治

学者稼業も二〇年を越えると、いくつかの著書がたまってくる。そのなかには、外国語に翻訳された幸運な本もある。自著を外国語にする経験——といっても、わたしがどうか解する外国語はもはや英語だけなので、「自著を英語にする経験」というべきなのだろうが——は、日本語で書くときに暗黙の前提にしていたことを気付かせてくれる経験でもあった。

自著を英語にするといっても、独力で完全な英訳ができるほどの語学力はわたしにはない。いくつかある英訳書や英語論文のほとんどは、翻訳家による労作をわたしが校閲するか、わたしの下手な英訳をネイティブに直してもらったものであることを、最初に白状しておく。とくに、*Shots in the Dark: Japan, Zen, and the West* (The University of Chicago Press and Nichibunken, 2009) はアール・ハルトマンさん‘*“Pirate” Publishing: The Battle over Perpetual Copyright in Eighteenth-Century Britain* (Nichibunken, 2012) はリン・リッグスさんという、得がたい優れた翻訳家が英訳し、日文研の同僚のパトリシア・フィスターさんの編集作業を経て世に出たものである。したがって、わたしにとっての著書の英訳の経験とは、これらのプロフェSSIONナルな方々との共同作業の経験のことでもある。

さて、わたしが日本語で書くときに暗黙の前提にしていたことは、ひとことでいえば、日本語が読める読者ならばわたしと文化を共有する「日本人」であろうという決め付けだった。

それがどれほどよろく、馬鹿げた思い込みだったかは、少し考えたらわかることだった。

しかし、それは日本の出版社と仕事をしている限りにおいては、実用的には問題にはならない前提でもある。日本国内において日本語で出版するときには、言語だけでなく日本のある時代を生きた経験や、他の文化的なことの多くを共有する、ある程度の数の読者層を念頭に置いている。そもそも一定数の読者を見込めない本は、商業出版として成り立たない。日本語の本の主たる読者は、漠然としたいわゆる「日本人」なのである。

書く方も、当然のようにそういう「日本人」に向けて書いている。日本文化にまつわる本ならば、なおのこと「日本人」だというアイデンティティーを持った読者を意識する。ところが、それを外国語に変えようとすると、Line-to-Lineの翻訳では、「宛先の違うメッセージ」になってしまう。

たとえば、「日本人」の読者に向けた一般書では、「わたしたち」という便利なことばを、わたしは安直に使っていた。「わたしたち」とはいったい誰なのか？ この文章を書く「わたし」がいて、その「わたし」と多くの属性を共有していると思われる集団のみを、読者として暗黙裏に想定していることが、「わたしたち」の語の背景には隠れていた。

ところが、その文章を英訳しようとしたとたんに、異なる文化圏に属する読者には「わたしたち」の語が通用しないことに、はたと気が付く。仕方なく日本語の「わたしたち」の部分は、翻訳者の勧めにしがって「We Japanese」とすることにしたが、「では「Japanese」とは誰か？」という問いには簡単には答えられない、そういう欠点を露呈させる文章になってしまふ。それも著者の当初の思慮が足りなかったことに原因がある。書き手の実力のなさを示す、正直な文章だったとも思う。

もちろん、以前にも学術論文ではそんなことばは使わなかったし、いまでは一般書を書くときにも「わたしたち」の使い方には注意している。このことばのあいまいさと政治性に気付かされたのも、著書の英訳という作業を通してだった。

日本語を母国語とし、国籍が日本人で、日本国の領土に永く暮らし、そこで教育を受けてきた著者の属性と、その著者に（この場合）欧米の学術出版社が期待するテーマには、深い関係があるように感じている。*Shots in the Dark* は、わたしが書くにはその観点で好適なテーマだった。もちろん、わたしの所属が日文研であることも、シカゴ大学のレフェリーたちの判断に影響を与えただろう。そして、わたしの所属が日文研であるがため、その創設時に欧米で流布した風評に基づく批判が、某学術誌のレビューで展開されることにもなった。それはそれで興味深い経験であったが、著者の属性にかかるフィルターが、欧米の学術界に根強いことを実感した。

もうひとつの英訳書の“*Pirate Publishing*”の場合は、前著とはかなり様相が違った。そのテーマは、一八世紀イギリスの出版史・法制史・文学史がオーバーラップする領域だった。それが現代日本の文化状況と関係があることは、同書の序文をお読みいただけたら理解できるだろう。しかし、日本学の研究機関に属する研究者が書いたイギリス史の本なので、欧米の学術マーケットで受入れられる可能性は少ないだろうと思っていた。

英語も満足に使いこなせない日本人が書いたイギリスの歴史書など、欧米の出版社は出してくれないだろう——そういう不安を友人であるアメリカ人の日本研究者にした。すると彼女は、もしそうなら日本語をきちんと使えないアメリカ人のわたしが書いた日本についての本など、日本語では出版されないでしょうねといった。そのときは、ああそれとおなじことですね

と笑っていたが、よく考えてみるとおなじではない。その理由は、ルース・ベネディクトの『菊と刀』（一九四六）からアン・アリスンの『菊とポケモン』（二〇一〇、原題は『ミレニアル・モンスターズ』）まで、日本の出版界には「外国人（とくに西欧人）による日本文化論」というジャンルが確立しているからだ。そうした日本と欧米の出版マーケットの非対称性については、さらに考察する必要がある。

“Private Publishing”の日文研との共同出版のプロポーザルをいくつもの欧米の学術出版社に送ってみたが、予想通りよい返事はないに得られなかった。最終的には、紙媒体の書籍を日文研の単独で出版すると同時に、日文研初の試みとしてコピー・再配布自由のクリエイティブ・コモンズ・ライセンスを付けたPDFファイルを公開した。同書の電子版は、日文研のサイトに加えてGoogle BooksやScidbなどからも無料で入手できるようにした。そのほうが、紙媒体の書籍や商業ベースの電子出版よりも広く読まれることが期待できたからだ。結果、二〇一四年四月時点でScidbだけでも同書は一〇〇〇ビューを超えている。もちろん、ファイルを開いたすべてのひとびとが、全体を熟読して下さっているはずはないのだが、PDF公開の狙いは達成できたと考えている。

細かな技術論にも少し触れておこう。日本語では成立する文章でも、それを横文字にするにあたって、追加の情報が必要なことも多い。典型的なのは、人名・地名などの漢字の固有名詞の読み方である。日本語で書いているぶんには、漢字で書けば事足りるので、自分がその固有名詞の正式な読み方を知らないという事実をやり過ごしてしまう。講演でもすれば読めない名前を調べるのだから、書き物であれば、たとえ読めなくてもそれで済んでしまう。

日本語の文献でカタカナ表記された西洋人名を、アルファベットに戻すことも難しい。ある

程度著名な人物ならばスベルの調べもつくが、そうでなければ推測するしかない。

これは小説の日英翻訳などでよく話題になることだが、名詞が単数か複数かという点も大問題である。自著の翻訳にかかわってみて、日本語で考えるときのあいまいさと英語の厳格さが身にしみた。たとえば、ある人物に愛人がいたと書く場合、日本語ならば「愛人がいた」で済む。ところが、英語の文法は愛人がひとりなのか、ふたり以上なのか、はっきりさせることを要求する。それを確認するには、資料をひっくり返してもう一度調べ直さないといけない。

だから、わたしが理解できない言語への翻訳については、著者のわたしはその内容の正確さを保証できない。わたしの文章のいくつかは、中国語や韓国語、イタリア語にもなっている。しかし多くの場合、その翻訳にあたって訳者から細かな問い合わせを受けていない。また国によって出版事情により原意をそのままに訳すことができないことも承知している。これらの理由で、英語以外への翻訳のクオリティを、著者のわたしは保証できない。

自著を外国語にする、とりわけ英語にする魅力は、何といっても数の上でも面的な広がりの上でも、日本語版をはるかに超える多様な読者を獲得できることにある。おかげで、フランスの研究機関に招かれて、自著をめぐってわたしの理解できないフランス語での議論が展開される経験をしたり、イタリア語やドイツ語によるネットへの書き込みをみかけたりするようになった。わたしが考えたことを世界のひとびとも考えてくれている。それこそが研究者という職業の愉悅である。

(国際日本文化研究センター教授)

日文研の地域連携活動より

日文研の先生方による出前授業

林 正幸

平成八年度、「日文研の先生方に小学校で授業をしていた
きたい」、村田喬子第三代校長が国際日本文化研究セン
ター所長でいらっしやった河合隼雄先生にお願いをされ、河
合隼雄所長をはじめ高名な教授の方々が快諾されて実現とな
り、この授業が始まりました。今年度は、その平成八年
(一九九六年) から一九九年目になります。

桂坂小学校ではこれまでから「人とよりよくかかわり、楽
しくまなぶ桂坂の子」を学校教育目標に掲げ、日々教育活動

を進めているところです。また、一人一人の子どもに「生き
る力」を育成し、学校・家庭・地域社会がそれぞれの役割を
十分に果たし、相互に連携し合う「地域と結ばれた学校」の
実現にも努めております。学校として地域社会に積極的に働
きかけ、子どもたちが地域の活動に積極的に参加するよう
に支援するとともに、地域の教育力を学校に頂戴しながら、と
もに子どもを育てる教育環境を創造し、その活動を展開して
いきたいと考えております。

平成二五年度も五・六年生各四クラス、八名の先生から
『授業』をしていただきました。その中で今回はお二人の先
生からの授業につきまして紹介いたします。

細川周平先生からは「ブラジルってどんな国？」という題
目で、サッカーW杯やオリンピックの開催国として今話題の



桂坂小学校での授業風景
上：細川周平先生
下：北浦寛之先生

ブラジルについて、歴史や日系移民、ワールドカップやオリンピックなど幅広いお話をいただきました。子どもたちは最近よく耳にする関心のある国のことだけに興味をもって聞き入ることができました。

北浦寛之先生からは「宮崎駿映画の魅力」という題目の授業で、宮崎映画の魅力を「天空の城ラピュタ」をもとに考えるものでした。多くの子どもたちは「ラピュタ」を観たことがあります、どんな話だったかは知っていました。しかし、北浦先生から、「映画の中にはシータが空から落ちるシーンがあるけれど、それぞれに重要な意味があるのだ。」と教えていただき、それぞれのシーンの中に物語の重要な伏線がかくれていることに気付いた子どもたち。今回は、周りの見方が変わり、自分の思いが広がることがあると改めて感じる一時間でした。

保護者の方からも学校評価の記述欄に「日文研の先生に学んだことは、学問の広さを感じるきっかけになったのではないかと思います。せっかくの機会なので、多くの先生のお話を聞くことができたらと思います。」と記入いただくこともありました。子どもも保護者も高学年になったら、お隣の日文研の先生方による授業が受けられると期待をされている

ところです。

日文研の皆様のご協力によりこれまで継続して実施されてきました授業は、子どもたちにとって、「小学生の時にそれぞれの学問について深く研究されている学者の先生が教室に来てくれて授業をしてくださった」といつまでも残るものとなっております。

今後も、この『授業』の取組を、日々のお忙しい研究活動の中で何とかお時間をつくっていただき続けていただくこと、必ず子ども心に生涯にわたって残り、「生きて働く力」となるものと確信しております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

(京都市立桂坂小学校校長)

出版編集室より
「紙の本」づくり

白石 恵理

日文研の出版活動

日文研には出版編集室がある。芝生が広がる「回廊の庭」に面した一室で、野鳥の声を聞き、四季折々の風や光を背に受けながら、ほとんどの時間を文字と共に過ごしている。仕事は大きく分けて、「作る」と「届ける」ことの二つ。論文原稿を整理・編集・校正し、印刷会社の協力を得て印刷・製本後に刊行する（＝作る）。そして出来上がった本を、国内および世界各国へ発送する（＝届ける）。もちろんその過程には、出版編集室の三名のスタッフに加え、編集責任者となる先生方、執筆者、外部のデザイナーや翻訳者、所内の財務・総務・広報担当スタッフなど多くの人々の協力が欠かせない。編集・校正は時に孤独な作業を伴うが、一冊の本を期限内に仕上げるには効率のよいチームワークが鍵となる。

出版編集室が制作を担当する出版物には、定期刊行物として『日本研究』（年二回発行、日本語）と *Japan Review*（原

則年一回発行、英語）の二誌がある。いずれも、日本研究に関する公募原稿を専門家による査読を経て掲載する学術論文誌である。他に、「日文研叢書」、「*Nichibunken Monograph*」（英文単著）シリーズ、研究協力課と連携して制作している国際研究集会や海外シンポジウムの報告書、『世界の日本研究』等を合わせ、年平均一五冊ほどを刊行している。また、共同研究成果を商業出版する際のサポートや、日本語の基礎文献を世界各国の言語に翻訳し出版する活動への協力（「日文研翻訳出版協力プロジェクト」）も行っている。

すべて非売品である日文研発行の新刊は、毎年、前半と後半の二回に分けて、国内一、〇〇〇件と海外（アジア、ヨーロッパ、北米、南米、アフリカ、オセアニア）一、五〇〇件の合計二、五〇〇件、年間のべ五、〇〇〇件の大学図書館・研究機関・個人に寄贈される。それ以外にも特定の出版物のバックナンバー入手を希望する機関や研究者に対しては、在庫事情が許す限り、日に数件ずつ個別に送付している。

日文研出版物の特色と傾向

日本の歴史や文化に関わる内容であれば、ほとんどの研究分野・テーマを懐深く受け入れる日文研らしく、本のタイト

ルや掲載論文の研究対象はバラエティーに富んでいる。「植民地」「帝国日本」「近代の超克」「概念と知の再編成」「東洋意識」等の言葉が近年のタイトルに目立つ一方、例えば、『日本研究』や *Japan Review* には、一般に「メディア文化」「大衆文化」と称される映画・テレビ・マンガ・アニメ・ネット等をテーマとする論文投稿が増えつつある。また、テーマとは別に投稿者の内訳をみると、中国・台湾・韓国等を中心としたアジア圏からの応募が非常に活発である。これは京都を訪れる外国人観光客や日文研の外国人研究員全体に占める最近の比率とも合致する。

ここ五年ほどの流れとして、日文研の出版物は多言語化の傾向をますます強めている。日英はもちろんのこと、中国語（簡体字・繁体字）・ハングル・フランス語に加え、論文中文献にはドイツ語やロシア語、ポルトガル語なども登場する。また *Japan Review* や *Nichibunken Monograph* シリーズなど、英文図書の刊行が常となり、日英両方の編集・校正能力が当然求められるようになった。マルチ言語掲載の動きに今後どのように対応していくか、その編集体制作りが近い将来の課題となるだろう。

その他、特筆すべきこととして、*Nichibunken Mono-*

graph シリーズを海外の大学出版会や商業出版社と共同出版する機会が増えている。国によって契約方法や経理システムが異なるため、財務担当スタッフには多大な苦勞を強いており、手続きや評価の点に課題は残る。しかし、一冊の本を国の違いを超えて共同編集するプロセスは刺激的で、各国の出版事情を知る好機でもあり、出版というチャンネルから新たな交流を促進する大切な営みだと考えている。

これからの本づくり

創設以来、「紙の本」という新しい呼び名が定着した印刷冊子体を一貫して制作・発行し続けてきた日文研はいま、電子化の潮流への対応を迫られている。昨年、ホームページのリニューアルに合わせ、全出版物のうち、著作権者の許可を得た論文についてはすべてPDFを公開し、電子書籍形式での閲覧も可能にした。特に欧米の研究者から電子公開は好評を得ている。一方、印刷媒体を根強く望む大学図書館や研究者も少なくない。

ここ数年、所内でも、「紙」と「電子」をめぐる議論が沸騰しているが、個人的には、「紙」か「電子」かの二項対立ではなく、「紙」も「電子」もの共存を上手に図る工夫が必

要だと考えている。社会の動きを見ても、どちらかに特化する事態にならないのではないか。これまで発行してきた出版物をいま一度、シリーズごとに一冊ずつ、その内容を丁寧に見直し、「紙」と「電子」とどちらの媒体がより相応しいかを吟味した上で、今後の適正な印刷部数を検討する段階にきていると思う。

本づくりは、手間と時間とコストがかかる贅沢な作業である。だからこそ、これからの印刷物は、数量としてはある程

度淘汰される一方で、その企画内容や装丁・デザインにはこれまで以上の充実が求められるだろう。

夏の雲消しても残る紙の本

(国際日本文化研究センター

資料課 出版編集プロジェクト員)

共同研究

二〇一三年一〇月一日～二〇一四年三月三十一日

人文諸学の科学史的研究

(研究代表者 井上章一、幹事 瀧井一博)

〔共同研究員名〕

今谷明、上島享、上村敏文、鵜飼正樹、内田忠賢、長田俊樹、小澤実、小路田泰直、斎藤成也、佐藤雄基、関幸彦、高木博志、高谷知佳、竹村民郎、玉木俊明、鶴見太郎、永岡崇、林淳、シルヴィオ・ヴィータ、藤原貞朗、安田敏朗、若井敏明、荒木浩、伊東貴之、大塚英志、倉本一宏

〔研究発表〕

〈第三回研究会〉

二〇一三年一月九日

井上章一「日本のゲルマニストと関東史観」

荒木 浩「文学史の『鎌倉』時代」

二〇一三年一月一〇日

佐藤雄基「もう一つの日本列島史への想像力―鎌倉期の国家と地域」

関 幸彦「篡奪か委任か、中世史学史の足跡―京都と鎌倉」

〈第四回研究会〉

二〇一四年二月一日

竹村民郎『天皇主義』サンディカリズムをめぐるって」

竹村民郎・井上章一「戦後近・現代史学をめぐるって」

〈第五回研究会〉

二〇一四年三月二八日

高谷知佳「比較都市論と時代区分」

宇野隆夫「考古学都市論の系譜と私の都市論―難しく考え

ることはない―」

井上章一「都市像の変容をめぐるって」

日本庭園のあの世とこの世―自然、芸術、宗教

〔研究代表者 白幡洋三郎、幹事 榎本 渉〕

〔共同研究員名〕

小野健吉、グエン・テイ・ホアン・チャ、鈴木久男、多田
伊織、豊田裕章、原口志津子、原田信男、錦仁、飛田範
夫、日向進、町田香、水野杏紀、村井康彦、山田邦和、横
山正、吉澤健吉、荒木浩、外村中

〔海外共同研究員名〕

蔡敦達、陸留弟

〔研究発表〕

〈第三回研究会〉

共同研究シンポジウム『「大名庭園」の新発見』

二〇一三年一月八日

司会 榎本 渉

水野杏紀「スケジュール説明」

白幡洋三郎「趣旨説明」

近藤真佐夫「会津藩 御薬園と城下の庭園」

コメント 錦 仁

平出真宣「六義園における遊興と信仰」

コメント 多田伊織

佐藤豊三「大名庭園と尾張徳川家」

コメント 原田信男

近藤 壮「紀州藩の庭園・西園―その政治的機能―」

コメント 飛田範夫

伊藤康晴「因州鳥取藩の庭園・御茶屋・鴨堀―娯楽と饗応

のかたち―」

コメント 荒木 浩

二〇一三年一月九日

司会 榎本 渉

知念 理「広島藩・縮景園」

コメント 蔡 敦達

杉本 竜「松平定信と浴恩園―描かれた諸図を通して―」

コメント 山田邦和

永井 博「偕楽園―設立目的と景観―」

コメント 外村 中

小野健吉『「江戸図屏風」に描かれた庭園」

コメント 原口志津子

山田貴司「肥後細川家ゆかりの大名庭園・水前寺成趣園」

コメント 豊田裕章

御厨義道「栗林荘の成立と展開―大名庭園を考える視点」

コメント 水野杏紀

永松義博「長崎平戸藩主が残した用途多彩で特異な大名に

ついて」

コメント 小野健吉

二〇一三年一月一〇日

司会 榎本 渉

万城あき「岡山藩・岡山後楽園」

コメント 陸 留弟

日本の時空観の形成

〔研究代表者 吉川真司、幹事 倉本一宏〕

〔共同研究員名〕

井上直樹、今津勝紀、上島享、宇野隆夫、大津透、門井直哉、上川通夫、河上麻由子、神戸航介、佐藤早紀子、下垣仁志、武井紀子、武田和哉、西本昌弘、畑中彩子、林部均、古松崇志、細井浩志、本庄総子、横内裕人、荒木浩、榎本渉、劉曉峰、徳永誓子、堀井佳代子

〔海外共同研究員名〕

井上亘

〔研究発表〕

〈第三回研究会〉

二〇一三年一〇月一九日

河上麻由子「『梁職貢図とその世界観』―研究状況の紹介

と今後の課題―」

井上直樹「『高句麗勢力圏』と東アジア世界」

二〇一三年一〇月二〇日

下垣仁志「日本古代『国家形成期』の時空観」

今津勝紀「美作国の成立―古代における空間認識の復原的

研究（に向けて）―」

横内裕人「日本中世仏教の世界観―法隆寺蔵『五天竺図』

を手がかりに―」

〈第四回研究会〉

二〇一三年二月一四日

倉本一宏「撰関期古記録の時間軸について―特に『御堂関

白記』の執筆日時について―」

門井直哉「古代日本の方位観と国土観」

二〇一三年二月一五日

細井浩志「古代の時刻制度について」

佐藤早紀子「『天下』観と天下触穢」

畑中彩子「親王にとつての過去・未来―『吏部王記』重明

親王を事例に―」

神戸航介「熟国・亡国概念と摂関期の地方支配」

〈第五回研究会〉

二〇一四年二月一五日

劉 曉峰「比較文化視野の『本朝月令』研究」

林部 均「律令国家と畿内産土師器―土器からみた国家の

空間認識とその変遷―」

二〇一四年二月一六日

上島 享「日本中世における〈冥界〉観―顕界と冥界―」

榎本 渉「遣明船を守る神々」

古松崇志「一〇〇―一三世紀ユーラシア東方における天下

観」

〈第六回研究会〉

二〇一四年三月二二日

横内裕人「豆酩多久頭魂神社の中世史料」(多久頭魂神社

にて)

対馬南部の古代―中世遺跡(天道法師塔外) 見学

井上 亘「亀トの時空―神話と儀式の現在―」

二〇一四年三月二二日

坂上康俊「金田城跡調査研究の成果と課題」(金田城跡に

て)

金田城跡、対馬北部の古代―中世遺跡(黒瀬観音堂外) 見

学

二〇一四年三月二三日

細井浩志「対馬の亀ト資料」(対馬歴史民俗資料館にて)

亀ト関係資料、対外関係史料検討(対馬歴史民俗資料館に

て)

夢と表象―メディア・歴史・文化

(研究代表者 荒木 浩、幹事 マルクス・リュッターマ

ン)

〔共同研究員名〕

安東民兒、池田忍、入口敦志、上野勝之、鍛治恵、加藤悦

子、河東仁、笹生美貴子、仙海義之、高橋文治、立木宏

哉、玉田沙織、林千宏、平野多恵、福島恒徳、藤井由紀

子、松蘭斉、松本郁代、箕浦尚美、室城秀之、木村朗子、

伊東貴之、倉本一宏、早川聞多、榎本渉、郭南燕、中川真

弓、丹下暖子

〔海外共同研究員名〕

ヨーク・B・クヴェンツァー、アイヴ・コヴァチ、李育娟

〔研究発表〕

〈第四回研究会〉

二〇一三年一月三〇日

木村朗子「日本中世の夢と占い」

室城秀之「平安文学における死者の夢」

二〇一三年二月一日

中川真弓「慶政の見た夢」

加藤悦子「夢の表象？―夕顔あるいは瓜―」

〈第五回研究会〉

二〇一四年一月二五日

丹下暖子「中古・中世における女性の日記と夢」

李 育娟「医者の夢―『今昔物語集』「病成人形医師聞其

言治病語」小考―」

二〇一四年一月二六日

林 千宏「夢におけるイメージの崩壊―ジョアキム・

デュ・ペレー『夢』を巡って」

安東民兒「空也と夢中見仏をめぐって」

建築と権力の相関性とダイナミズムの研究

〔研究代表者〕 御厨 貴、幹事 井上章一

〔共同研究員名〕

五十嵐太郎、池内恵、小宮京、佐藤信、砂原庸介、手塚洋輔、中村武生、牧原出、松宮貴之、奈良岡聡智

〔海外共同研究員名〕

朴喜用

〔研究発表〕

〈第三回研究会〉

二〇一三年一〇月六日

手塚洋輔「合同庁舎の史的展開」

池内 恵「二〇二〇年東京五輪の国際建築史上の文脈―ア

ラブ系建築家ザハー・ハディードと政治権力」

〈第四回研究会〉

二〇一三年二月一日

佐藤 信「議事堂をめぐる政治」

中村武生「幕末期政治の主要人物、京都居所論―坂本龍馬

はなぜ河原町三条界限に住んだのか」

〈第五回研究会〉

二〇一四年二月八日

朴 喜用「帝国の権力と都市空間の変動」

奈良岡聰智「大使館建築論—イギリス、ベルギーの駐日大

使館を中心として」

〈第六回研究会〉

二〇一四年三月二二日

五十嵐太郎「建築家と政治家」

牧原 出「大磯吉田茂邸をめぐる権力と建築—政治家吉田

茂再考」

昭和四〇年代日本のポピュラー音楽の社会・文化的分析—

ザ・タイガースの研究

(研究代表者 磯前順一、幹事 井上章一)

〔共同研究員名〕

浅尾雅俊、飯田健一郎、小野善太郎、金谷幹夫、黒崎浩

行、永岡崇、中村俊夫、藤本憲正、松本清、水内勇太、倉

本一宏、細川周平、エリザベッタ・ポルク、光平有希

〔研究発表〕

〈第四回研究会〉

二〇一四年一月一八日

磯前順一・黒崎浩行・小野善太郎「タイガース共同研究会

の報告書 磯前・黒崎編」

中村俊夫「これまでの企画の成果について」

飯田健一郎「ザ・ファニーズ(タイガース)『青春の地』

探訪記—三つ子の魂、百まで—」

水内勇太「ファン投票データ作成にあたって」

〈第五回研究会〉

二〇一四年三月八日

飯田健一郎「ザ・タイガース(ファニーズ)青春の洛中洛

外物語」

水内勇太「ファン投票にみるザ・タイガース」

飯田健一郎「ザ・タイガースをめぐる京都歩き」

黒崎浩行・飯田健一郎・水内勇太「雑誌記事目録作成につ

いて」

光平有希「ザ・タイガースと平和思想」

安仲佳代「文献リスト(ポルク・浅尾)について」

柿田 肇「ザ・タイガース コスチューム関連資料につい

て」

近代日本における指導者像と指導者論

(研究代表者 戸部良一、幹事 瀧井一博)

〔共同研究員名〕

五百旗頭薫、猪木武徳、小川原正道、河野仁、黒澤文貴、佐古丞、佐藤卓己、庄司潤一郎、武田知己、中西寛、野中郁次郎、波多野澄雄、楠綾子、奈良岡聡智、牛村圭、松田利彦

〔海外共同研究員名〕

黄自進、フレデリック・デイキンソン

〔研究発表〕

〈第二回研究会〉

二〇一三年一〇月五日

戸部良一「報告書序章について」

二〇一三年一〇月六日

庄司潤一郎「自主性を貫く戦後の近衛文麿と『国体護持』

―『家柄』と政治指導―

河野 仁「現代の軍事リーダーシップ―ハイブリッド安全

保障とCOINドクトリン―

〈第三回研究会〉

二〇一四年一月二五日

奈良岡聡智「参戦外交再考―第一次世界大戦の勃発と加藤

高明外相のリーダーシップ―

フレデリック・デイキンソン「戦間期の世界における政治指導の課題―昭和天皇を中心に―」

二〇一四年一月二六日

佐藤卓己「管制高地に立つ編集者・吉野源三郎―平和運動における軍事的リーダーシップ―」

徳川社会と日本の近代化―一七〇―一九世紀における日本の文化状況と国際環境―

〔研究代表者 笠谷和比古、幹事 佐野真由子〕

〔共同研究員名〕

磯田道史、伊藤奈保子、岩下哲典、上村敏文、魚住孝至、大川真、加藤善朗、上垣外憲一、郡司健、小林龍彦、小林善帆、菅良樹、高橋博巳、武内恵美子、竹村英二、谷口昭、芳賀徹、長谷川成一、原道生、平井晶子、平木實、藤實久美子、前田勉、真栄平房昭、松山壽一、宮崎修多、宮田純、森田登代子、横谷一子、横山輝樹、米沢薫、脇田修、和田光俊、滝澤修身、辻垣晃一、伊東貴之、瀧井一博、フレデリック・クレインス、姜鶯燕

〔海外共同研究員名〕

平松隆円

〔研究発表〕

〈第四回研究会〉

二〇一三年一〇月二五日

森田登代子「『道の幸』から『諸国風俗問状答』へ―屋代

弘賢の軌跡―

谷口 昭「幕末の転封―一九世紀の国際環境のもとで―」

二〇一三年一〇月二六日

和田光俊「西洋天文学の受容と改暦―蘭書の導入をめぐる

て―」

原 道生「二百年余にわたる定期刊行物―役者評判記につ

いて―」

磯田道史「水戸藩天保改革の同時代的評価と影響―新史料

『水戸見聞録論』の分析―」

〈第五回研究会〉

二〇一三年一二月六日

平木 實「一七―一九世紀における日本の文化状況と国際

環境―

大川 真「新井白石による徳川政権の合法化論―」

二〇一三年一二月七日

武内恵美子「釈奠と楽―」

平井晶子「近世日本における家族観の変容―宗門人別改帳
の分析より―」

上村敏文「明治維新の宗教政策―水戸学、久米幹文を中心
に―」

〈第六回研究会〉

二〇一四年二月一四日

滝澤修己「日本人の先祖崇拜とキリシタン―」

高橋博巳「兼葭雅集図の行方―」

二〇一四年二月一五日

辻垣晃一「森幸安の地理認識―」

佐野真由子「幕末最終章の外交儀礼―徳川慶喜の外国公使

引見について―」

〈第七回研究会〉

二〇一四年三月二日

松平党史跡見学

討議「成果報告論集の作成について―」

二〇一四年三月三日

討議「成果報告論集の作成について―」

岡崎城、大樹寺見学

日本仏教の比較思想的研究

〔研究代表者〕 末木文美士、幹事 稲賀繁美)

〔共同研究員名〕

阿部仲麻呂、井上克人、沖永宣司、坂井祐円、坂本慎一、佐藤弘夫、島蘭進、ミシェル・ダルシエ、永井晋、中島隆博、西平直、西村玲、モリー・ヴァラー、シルヴィオ・ヴィータ、藤田正勝、前川健一、吉永進一、米田真理子、阿部泰郎、アントン・セベリア、高橋勝幸

〔海外共同研究員名〕

アンナ・アンドレーワ、鄭濠、許祐盛

〔研究発表〕

〈第四回研究会〉

二〇一三年一月九日

高橋勝幸 『『仏教とキリスト教の邂逅の道』キリシタン時代から続く対話の霊性を求めて』

坂井祐円 「慈悲はどこから起こってくるのか―曾我量深の法蔵菩薩論に寄せて―」

佐藤弘夫 「仏教の日本の変容と列島の神々」

〈第五回研究会〉

二〇一四年一月一日

鄭 濠 「日韓近世文学と仏教―西鶴『好色一代男』と西

浦『九雲夢』の作品世界を中心に―」

ミシェル・ダルシエ 「Place and Metaphysics NISHIDA

Kitarō's Response to SŌDA Kichirō, and Correspondence

with MUTAI Risaku」

許 祐盛 「後期西田の歴史哲学：哲学的転回 (The Philosophy

of History in the "Later" Nishida: A Philosophic Turn)」

〈第六回研究会〉

二〇一四年三月一日

アントン・セベリア 「空の倫理学―仏教と解釈学の間」

前川健一 「問答法の比較思想史：論議とスコラ哲学を手がかりとして」

ステイリアノス・パパレクサンドロポロス 「道元の一つの読み方」

二一世紀一〇年代日本文化の軌道修正：過去の検証と将来への提言

〔研究代表者〕 稲賀繁美、幹事 牛村 圭)

〔共同研究員名〕

テレングト・アイトル、鶴戸聡、大西宏志、小倉紀蔵、小

崎哲哉、鞍田崇、吳孟晋、近藤高弘、澤田敬司、全美星、
 戦曉梅、千葉慶、西田雅嗣、西原大輔、二村淳子、波嵯栄
 ジェニファしょう子、橋本順光、林洋子、範麗雅、平松秀
 樹、平芳幸浩、藤原貞朗、シルヴィー・プロッソー、クリ
 ストフ・マルケ、三原芳秋、本浜秀彦、山中由里子、山本
 麻友美、與那覇潤、マシュー・ラーキング、李建志、渡邊
 淳司、滝澤修身、張競、中村和恵、山田奨治、劉建輝、磯
 前順一、榎本渉、フレデリック・クレインス、森洋久、長
 門洋平、朴美貞

〔海外共同研究員名〕

大橋良介、デンニツァ・ガブラコヴァ

〔研究発表〕

〈第五回研究会〉

「商取引・藝術創作・海賊行為…社会制度の綻び目は文化
 創造のニッチとなるか?」

二〇一三年一月二四日

稲賀繁美「趣旨説明」

小川さやか「非正規品交易システムにみるインフォーマル

経済のダイナミズム」

岡本光博「バッタもんについて」

山本麻友美「オリジナリティと継承—ストリート系ア
 ティストは、都市の海賊か」

二〇一三年一月二五日

白石嘉治「〈半社会的〉とは何か? 気象学から平滑空間へ」
 孤田真介「P・L・ウィルソン著『海賊ユートピア』翻訳
 余話—海賊行為が切り開く現代的可能性」

万国博覧会と人間の歴史—アジアを中心に

〔研究代表者 佐野真由子、幹事 井上章一〕

〔共同研究員名〕

石川敦子、市川文彦、伊藤奈保子、鶴飼敦子、江原規由、
 川口幸也、神田孝治、寺本敬子、中牧弘允、芳賀徹、橋爪
 紳也、林洋子、武藤秀太郎、稲賀繁美、瀧井一博、ジョ
 ン・グリーン、劉建輝、シビル・ギルモンド、朴美貞

〔海外共同研究員名〕

青木信夫、岩田泰、ウィーベ・カウテルト、徐蘇斌

〔研究発表〕

〈第三回研究会〉

二〇一三年一月一九日

重富公生「一八五一年ロンドン万国博覧会とイギリスの産

業界―『世界の工場』の諸相

江原規由「上海万博と中国の都市化」

二〇一三年一〇月二〇日

佐野真由子「万博の人、ラザフォード・オールコック」

寺本敬子「パリ万博と日本人―徳川昭武・前田正名」

石川敦子「資料から見えるランカイ屋の歴史」

〈第四回研究会〉

二〇一三年一二月二一日

市川文彦「万博でのテーマ設定と展示アプローチの変遷過

程―近代の諸事例」

森田登代子「巴里をめぐる人とモノ（慶応三〜明治六）」

林 洋子『『東宮御所（赤坂離宮）装飾と万国博覧会』の

ためのスケッチ」

二〇一三年一二月二二日

増山一成「幻の博覧都市計画―東京月島・日本万国博覧会」

青木信夫「博覧会と中国の都市空間の変容」

〈第五回研究会〉

二〇一四年二月二二日

鵜飼敦子「物質文化の展示とその影響―ナンシーの装幀作

品と金唐紙」

神田孝治「地域表象と博覧会―観光との関連性に注目した

考察」

朴 美貞「植民地朝鮮と『水産』博覧会―朝鮮水産共進会

を中心に」

二〇一四年二月二三日

橋爪紳也「電気が見世物であった時代」

澤田裕二「愛知万博前夜―博覧会を作った人々の葛藤」

植民地帝国日本における知と権力

〔研究代表者 松田利彦、幹事 瀧井一博〕

〔共同研究員名〕

飯島渉、小野容照、加藤聖文、加藤道也、川瀬貴也、河原

林直人、栗原純、慎蒼健、通堂あゆみ、春山明哲、洪宗

郁、松田吉郎、宮崎聖子、やまだあつし、吉川絢子、李昇

燁、中生勝美、稲賀繁美、劉建輝、朴暎美

〔海外共同研究員名〕

陳延媛、李炯植

〔研究発表〕

〈第二回研究会〉

松田利彦・陳延媛編『地域社会から見る帝国日本と植民地

―朝鮮・台湾・満州― 書評会

二〇一三年一月二二日

李昇燁「第二章（地域社会団体）」

陳延媛「第一章（研究の現状）」

通堂あゆみ「第三章（宗教・慣習と社会教化）」

吉川絢子「第四章（慣習と法の「近代化」）」

松田利彦「志賀潔と植民地朝鮮」

〈第三回研究会〉

二〇一四年二月一日

中生勝美「書評『地域社会から見る帝国日本と植民地―

朝鮮・台湾・満州』第V部知識人・有力者・エリート」

加藤聖文「書評『地域社会から見る帝国日本と植民地―

朝鮮・台湾・満州』第VII部戦時体制下の地域社会」

顔杳如「『台湾趣味』の生成における知と権力―『台湾

歳時記』の知識体系と旧慣調査」

二〇一四年二月一日

鄭駿永「京城帝国大学の『大陸』研究―学術研究調査の

政治性と植民地大学の使命」

吳叡人「植民地主義とナショナリズムとの共生と相克…

概念の地図の試み」

宗炳卷「鈴木武雄の戦前と戦後」

「心身／身心」と「環境」の哲学―東アジアの伝統的概念の
再検討とその普遍化の試み―

〔研究代表者 伊東貴之、幹事 榎本 渉〕

〔共同研究員名〕

青木隆、新井菜穂子、井上厚史、恩田裕正、垣内景子、片

岡龍、橋川智昭、権純哲、黒住眞、桑子敏雄、河野哲也、

小島毅、鈴木貞美、関智英、銭国紅、高橋博巳、竹村英

二、竹村民郎、田尻祐一郎、陳継東、陳健成、土田健次

郎、永富青地、西澤治彦、長谷部英一、林文孝、松下道

信、水口拓寿、横手裕、李梁、末木文美士、ジョン・ブ

リオン、劉建輝

〔海外共同研究員名〕

フレデリック・ジラルド、黄海玉、張翔、手島崇裕

〔研究発表〕

〈第三回研究会〉

二〇一三年一月九日

特別講演

大谷敏夫「清代思想史研究の動向」

コメント・対論 茂木敏夫・高柳信夫・林 文孝

〈第四回研究会〉

二〇一三年二月一四日

関 智英「日中道義問答―日米開戦後、『道義的生命力』を巡る和平派中国知識人の議論」

竹村民郎「安岡正篤の『天子論』とその周辺」

〈第五回研究会〉

二〇一四年一月二六日

井上厚史「明代心学と李退溪心学―朝鮮儒教の多様性と独

自性―」

権 純哲「朝鮮儒学再考・研究史批判から」

〈第六回研究会〉

二〇一四年三月八日

新井菜穂子「日本人の空気観くことばの視点から探る」

永富青地「陽明後学の日常―鄒守益の詩文より見たる―」

二〇一四年三月九日

横手 裕「道教と仏教における『本然の性』と『気質の性』」

日本の教育文化の複数地域展開に関する比較研究―ブラジル・フィリピン・ハワイ・アメリカの日系教育史を中心に―

(研究代表者 根川幸男、幹事 井上章一)

〔共同研究員名〕

浅野豊美、飯窪秀樹、伊志嶺安博、大浜郁子、カール呉、

小林茂子、坂口満宏、佐々木剛二、住田育法、高橋美樹、

中原ゆかり、中村茂生、西村大志、東悦子、松盛美紀子、

物部ひろみ、森本豊富、柳下宙子、吉田亮、細川周平、石

川肇

〔海外共同研究員名〕

小林ルイス・オタビオ眞登、野呂博子

〔研究発表〕

〈第四回研究会〉

「新大陸の日系移民の歴史と文化」「日本の教育文化の複数

地域展開に関する比較研究」合同研究会

二〇一三年一〇月二六日

細川周平「書評 水野真理子(富山大学)『日系アメリカ

人の文学活動の歴史の変遷』を読みながら―日本とブ

ラジルの日系移民文芸史の比較」

日比嘉高「書評 水野真理子(富山大学)『日系アメリカ

人の文学活動の歴史の変遷』を読みながら―日本とブラジルの日系移民文芸史の比較―

小林ルイス・オタビオ眞登「戦前ブラジル日本人同胞者会に見える剣道の教育的役割」

二〇一三年一〇月二七日

住田育法「戦間期ブラジルの移民・教育政策とナシヨナリズムの高揚」

スエヨシ・アナ「ペルーに帰国した生徒の進学とキャリア―母国に日系ペルー人の適応―」

〈第五回研究会〉

二〇一三年一二月二二日

松盛美紀子「在米日本人移民社会における『二世教育』の取り組み―南カリフォルニア地域を中心に―」

小林茂子「旧南洋群島収容所における教育とその後の影響―テニアン島チューロ収容所の事例を手がかりに―」

東悦子「北米・加州における日系子弟教育―『加州日本語学園協会沿革史』(一九三〇)から」

〈第六回研究会〉

細川班・根川班合同開催共同研究会「北南米大陸と帝国日本をめぐる日系人の教育と文化―複数地域の連動に注

目して―

二〇一四年三月一日

井上章一「開会の辞」

根川幸男「シンポジウムの趣旨説明」

セッシヨン1 オールラ・ヒストリーにみる「移民」と「植民

司会 住田育法

森 幸一「沖繩系霊能者へユタの成巫過程とハイブリッ

ドな呪的救済世界の創造」

佐々木剛二「土曜会と百周年―ブラジル日本移民の知識実

践をめぐる二つの契機―」

野呂博子「多文化カナダの『架け橋』たち―『日本語人』

のインターカルチュラルアイデンティティの形成」

セッシヨン2 移民民をめぐる文芸活動と表象

司会 早稲田みな子

高橋美樹「沖繩・日本本土・ブラジルを越境・還流する沖

繩音楽レコード」

中原ゆかり「一九三〇年代の日系大衆音楽と二世たち」

細川周平「増山朗『グワラニーの森の物語』覚書」

共同討論① 移民研究の現状と課題―オールラヒストリー

資料の保存・整理・活用を中心に―

司会 根川幸男

討論者 森本豊富・中村茂生・朝日祥之

二〇一四年三月二日

セッション3 移殖民政策と教育1

司会 伊志嶺安博

小林茂子「開戦前後におけるマニラ日本人学校にみる教育

活動の変容―発行された副読本と児童文集を手がかりに―

石川 肇「教科書に見る移殖民表象」

大浜郁子「沖繩出身台湾教育経験者による台湾教育経験と

沖繩における『戦後』復興―台北師範学校が輩出した

『復帰』運動の担い手たち―

セッション4 移殖民政策と教育2

浅野豊美「福島県原子力開発の古層―県人移民ネットワーク

クと最先端高等教育」

柳下宙子「戦前期外務省における移民担当局部署・構成員

からみた移民教育」

吉田 亮「日系キリスト教会の社会教育と満州」

共同討論② 移殖民研究の可能性と展望

司会 井上章一

討論者 浅野豊美・坂口満宏・根川幸男

マンガ・アニメで日本研究

〔研究代表者 山田奨治、幹事 荒木 浩〕

〔共同研究員名〕

飯倉義之、石田佐恵子、伊藤慎吾、伊藤遊、岩井茂樹、岡本健、金水敏、白石さや、山中千恵、山本冨里、油井清光、横濱雄二、吉村和真、谷川建司、北浦寛之、高馬京子、秦剛、小泉友則

〔研究発表〕

〈第三回研究会〉

二〇一三年二月二一日

作品検討 中沢啓治『はだしのゲン』（汐文社版）

吉村和真「はだしのゲンが伝えたかったこと―その表現と媒体から考える―」

伊藤 遊『『マンガ・アニメで日本研究』(『はだしのゲン』)

メモ

二〇一三年二月二二日

作品検討 中沢啓治『はだしのゲン』（汐文社版）

〈第四回研究会〉

二〇一四年三月十五日

作品検討 諫山創『進撃の巨人』

山中千恵「サブカルチャーが社会現象になるとき 韓国に

おける『進撃の巨人』を事例として」

山口冴里「『進撃の巨人』の『社会性』と、言語（日本語）

教育」

横濱雄二「『進撃の巨人』二学生の例」

北浦寛之「『進撃の巨人』における『編集』と違和感」

二〇一四年三月一六日

スクリーニング、デイスカッション

上映作品『TVアニメ「ガールズ&パンツァー」(二〇一二)』

新大陸の日系移民の歴史と文化

(研究代表者 細川周平、幹事 瀧井一博)

〔共同研究員名〕

赤木妙子、アンジェロ・イシ、桑井輝子、栗山新也、小

嶋茂、佐々木剛二、スエヨシ・アナ、高木（北山）眞理

子、滝田祥子、竹村民郎、日比嘉高、松岡秀明、水野真

理子、フェリッペ・アウグスト・ソアレス・モッタ、物部

ひろみ、森本豊富、守屋貴嗣、守屋友江、柳田利夫、吉田

裕美、早稲田みな子、高橋勝幸、根川幸男、エドワード・マック、森幸一

〔研究発表〕

〈第四回研究会〉

「日本の教育文化の複数地域展開に関する比較研究」「新大陸の日系移民の歴史と文化」合同研究会

二〇一三年一〇月二六日

細川周平「書評 水野眞理子（富山大学）『日系アメリカ

人の文学活動の歴史の変遷』を読みながら―日本とブ

ラジルの日系移民文芸史の比較」

日比嘉高「書評 水野眞理子（富山大学）『日系アメリカ

人の文学活動の歴史の変遷』を読みながら―日本とブ

ラジルの日系移民文芸史の比較」

小林リス・オタビオ眞登「戦前ブラジル日本人同胞者会

に見える剣道の教育的役割」

二〇一三年一〇月二七日

住田育法「戦間期ブラジルの移民・教育政策とナショナルリ

ズムの高揚」

スエヨシ・アナ「ペルーに帰国した生徒の進学とキャリア

―母国に日系ペルー人の適応―」

〈第五回研究会〉

細川班・根川班合同開催共同研究会「北南米大陸と帝国日

本をめぐる日系人の教育と文化―復教地域の連動に注

目して―」

二〇一四年三月一日

井上章一「開会の辞」

根川幸男「シンポジウムの趣旨説明」

セッション1 オーラル・ヒストリーにみる「移民」と「植民」

司会 住田育法

森 幸一「沖繩系霊能者へユタ」の成巫過程とハイブリッ

ドな唯的救済世界の創造」

佐々木剛二「土曜会と百周年―ブラジル日本移民の知識実

践をめぐる二つの契機―」

野呂博子「多文化カナダの『架け橋』たち―『日本語人』

のインターカルチュラルアイデンティティの形成」

セッション2 移住民をめぐる文芸活動と表象

司会 早稲田みな子

高橋美樹「沖繩・日本本土・ブラジルを越境・還流する沖

縄音楽レコード」

中原ゆかり「一九三〇年代の日系大衆音楽と二世たち」

細川周平「増山朗『グワラニーの森の物語』覚書」

共同討論① 移住民研究の現状と課題―オーラルヒストリー

資料の保存・整理・活用を中心に―

司会 根川幸男

討論者 森本豊富・中村茂生・朝日祥之

二〇一四年三月二日

セッション3 移住民政策と教育1

司会 伊志嶺安博

小林茂子「開戦前後におけるマニラ日本人学校にみる教育

活動の変容―発行された副読本と児童文集を手がかり

に―」

石川 肇「教科書に見る移住民表象」

大浜郁子「沖繩出身台湾教育経験者による台湾教育経験と

沖繩における『戦後』復興―台北師範学校が輩出した

『復帰』運動の担い手たち―」

セッション4 移住民政策と教育2

浅野豊美「福島県原子力開発の古層―県人移民ネットワー

クと最先端高等教育」

柳下宙子「戦前期外務省における移民担当局部署・構成員

からみた移民教育」

吉田 亮「日系キリスト教会の社会教育と満州」

共同討論② 移植民研究の可能性と展望

司会 井上章一

討論者 浅野豊美・坂口満宏・根川幸男

日記の総合的研究の総括

〔研究代表者 倉本一宏、幹事 榎本 渉〕

〔共同研究員名〕

有富純也、板倉則衣、井原今朝男、今谷明、磐下徹、上島
 享、上野勝之、小倉慈司、尾上陽介、加藤友康、久富木原
 玲、古藤真平、近藤好和、佐藤信、佐藤全敏、下郡剛、末
 松剛、曾我良成、中村康夫、名和修、西村さとみ、カレ
 ル・フィアラ、藤本孝一、古瀬奈津子、松蘭斉、三橋順
 子、三橋正、森公章、山下克明、吉川真司、中町美香子、
 荒木浩、井上章一、劉曉峰、堀井佳代子

〔研究発表〕

〈第二回研究会〉

二〇一三年一〇月一九日

丸山裕美子「撰関・院政期の病と医療」

〈第三回研究会〉

二〇一四年二月一五日

今西祐一郎「仮名日記と日付」

基礎領域研究

古文書研究（継続）

代表者 笠谷和比古

概要 前近代の草書文字で記された古文書や日記・記録な
 どの読解を行う。

近世風俗未公刊資料解読（継続）

代表者 早川聞多

概要 センター所蔵の近世風俗資料の解読および変体仮名
 の読解演習を行う。

フランス語運用の基礎／応用（継続）

代表者 稲賀繁美

概要 フランス語の運用の基礎を実践的に訓練し、あわせ
 て必要に応じて論文講読、仏文論文作成の手ほどきをする。

韓国語運用の基礎／応用（継続）

代表者 松田利彦

概要 研究その他の業務で韓国語を必要とするものに対し、会話、読解、聴解の習得を目指した授業を行う。

中国語運用の基礎／応用（継続）

代表者 郭 南燕

概要 研究その他の業務で中国語を必要とする人に対して、中国語運用の基礎を実践的に訓練し、会話、読解、聴解の習得を目的とする。

彙報

(平成二五年一〇月一日)

平成二六年三月三十一日

人事異動

◎平成二五年一〇月一日 契約

(客員)

外国人研究員 外村 中 (ヴェルツブルグ大
学講師)

外国人研究員 ハラルド・フース (ハイデル
ベルク大学教授)

外国人研究員 森 幸一 (サンパウロ大学日
本文化研究所所長)

◎平成二五年一〇月一日 採用

(特任研究員)

海外研究交流室特任助教 宮崎康子

◎平成二五年一〇月一日 契約

外国人研究員 王 鍵 (中国社会科学院近

代史研究所研究員)

◎平成二五年一月三〇日 契約

外国人研究員 チャン・ティ・ホアン・マイ
(ベトナム社会科学院附属東北アジア研究
院・情報図書センター所長)

◎平成二五年二月三十一日 契約満了

外国人研究員 マイケル・ディラン・フォス
ター (インディアナ大学准教授)

◎平成二六年一月一日 契約

外国人研究員 エミリア・シャロンドン
(トゥールーズ・ル・ミライユ大学日本語
学科講師)

◎平成二六年二月二十八日 契約終了

外国人研究員 徐 禎完 (翰林大学校日本学
研究所所長)

◎平成二六年三月一日 契約

外国人研究員 楊 際開 (杭州師範大学国学
院専任研究員)

◎平成二六年三月三十一日 定年退職

研究部教授 白幡洋三郎
研究部教授 戸部良一

◎平成二六年三月三十一日 契約満了

外国人研究員 根川幸男 (ブラジリア大学外
国語・翻訳学部准教授)

外国人研究員 戴 曉美 (復旦大学日本研究
センター准教授)

外国人研究員 外村 中 (ヴェルツブルグ大
学講師)

◎平成二六年三月三十一日 任期満了退職

(特任研究員)
特任教授 井村哲郎

◎平成二六年三月三十一日 委嘱期間満了

(客員)
教授 浦田義和 (久留米大学比較文化研究所
教授)

教授 張 競 (明治大学国際日本学部教
授)

教授 中村和恵 (明治大学法学部教授)

教授 木村朗子 (津田塾大学学芸学部教授)

准教授 辻垣晃一 (舞鶴東高等学校教諭)

准教授 中町美香子 (京都大学文学部非常勤
講師)

日文研フォーラム

第二七一回「平成二五年一〇月八日(火)」

発表者 エドワード・トーマス・マック (ワシントン大学准教授) / 日文研国際交流基金

—フェロー—

コメンテーター 細川周平教授

テーマ ブラジルの日本語文学

第二七二回「平成二五年一月五日(火)」

発表者 マイケル・ディラン・フォスター (インディアナ大学准教授) / 日文研外国人

研究員)

コメンテーター 山田奨治教授

テーマ 伝統と観光を考える—日本の来訪神

行事を事例として—

第二七三回「平成二五年一月一〇日(火)」

発表者 徐 禎完 (翰林大学校教授) / 日文研

外国人研究員)

コメンテーター 松田利彦教授

テーマ 近代能楽史と植民地

第二七四回「平成二六年一月二二日(火)」

発表者 陳 其松 (日本学術振興会特別研究員 (PD) / 日文研外来研究員)

コメンテーター 劉 建輝教授

テーマ 他者の風景—一九世紀西洋絵入り新聞から見る東アジア

第二七五回「平成二六年二月二二日(火)」

発表者 唐 権 (華東師範大学准教授) / 日文研外国人研究員)

コメンテーター 井上章一副所長

テーマ 『吾妻鏡(ウチジミ)』の謎—清末

中国へ渡った明治の性科学

第二七六回「平成二六年三月一日(火)」

発表者 高馬京子 (ミコラスロメリス大学准教授) / 日文研外国人研究員)

テーマ 『Kawaii』をめぐる表象—その形成と展開

発表者 ハラルド・フース (ハイデルベルク大学教授) / 日文研外国人研究員)

テーマ ポピュラー・カルチャーと世代間ギャップ—ヨーロッパにおける日本研究の将来は如何に

発表者 深井晃子 (京都服飾文化研究財団理事、チーフ・キュレーター)

テーマ 日本ファッションは「前衛」か? —Future Beauty 展の現場から

コメンテーター 山田奨治教授

木曜セミナー

第二〇一回「平成二五年一〇月一七日(木)」

話者 早川聞多教授

テーマ 大英博物館の春画展開催の報告

第二〇二回「平成二五年一月二一日(木)」

話者 森 洋久准教授

テーマ スマート・グリッド—エネルギーのゆくえ

第二〇三回「平成二五年一月一九日(木)」

話者 井村哲郎特任教授

コメンテーター 熱田見子 (外交史料館外務事務官)

テーマ 旧植民地関係資料の行方—日本の文

書破棄とGHQによる文献文書接収

第二〇四回「平成二六年一月二三日(木)」

書評者 井上章一副所長、細川周平教授
レスボンデント 磯前順一准教授

テーマ ザ・タイガースとボクらの時代―磯前順一『ザ・タイガース 世界はボクらを待っていた』(集英社新書)を読む

第二〇五回 [平成二六年二月二〇日(木)]
話者 朴 美貞機関研究員

コメンテーター 長佐古美奈子(学習院大学史料館学芸員)

テーマ 植民地朝鮮の表象―朝鮮写真絵葉書と官展入選作にみるイメージの相関性

Nichibunken Evening Seminar

第一八一回 [平成二五年一〇月三日(木)]

発表者 エドワード・トーマス・マック(ワシントン大学准教授/日文研国際交流基金フェロー)

テーマ Transgressive Readers and Writers:

On the Japanese-Language Literature of Brazil

第一八二回 [平成二五年十一月七日(木)]
発表者 マルコム・マクネル(ロンドン大学

東洋アフリカ研究院博士課程/日文研外来研究員)

テーマ Narrative Agency in 13th-14th Century Chan Figure Painting: A Study of Hagiography-Ikonography Text-Image Relationships

第一八三回 [平成二五年二月五日(木)]
発表者 米山尚子(アデレード大学助教授)

テーマ Animism for Modernity: Lessons from Minamata for the Post-Fukushima World

第一八四回 [平成二六年二月六日(木)]
発表者 シェームズ・マーク・シールズ(バックネル大学准教授/日文研国際交流基金フェロー)

テーマ Spring and Asura: Buddhist Progressivism in the Taishō Era

第一八五回 [平成二六年三月六日(木)]
発表者 シビル・ギルモンド(ヴェルツブルクリサーチアソシエイト、非常勤講師/日

文研来訪研究員)

テーマ Forgotten Treasures of Meiji Japan: The Nuremberg 1885 Exhibition Revisited

レクチャー

第一四一回 [平成二五年一月二八日(木)]

発表者 石野浩司(皇学館大学神道研究所客員研究員)

テーマ 伊勢神宮遷宮―古代制度のおもかげを見る―

主宰者 ジョン・ブリン教授
第一四二回 [平成二五年二月一日(水)]

発表者 ラジャシュリ・バンディ(ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジアジア政治学教授)

テーマ Rethinking the Body and Eroticism in Classical and Medieval Japanese Narratives

主宰者 荒木 浩教授

学術講演会

第五五回 [平成二六年三月一八日(火)]

講演者 白幡洋三郎教授

テーマ 山と島―日本庭園の源流と日本の自然観

講演者 戸部良一教授

テーマ 太平洋戦争を考える

司会 牛村 圭教授

人間文化研究機構公開講演会

〔平成二五年一〇月二一日（金）〕

テーマ 画像資料による日本人移民への新視

点―満州・ブラジル・南洋

講演者 劉 建輝教授

講演 地図と写真から見る満州移民と現地

社会

講演者 細川周平教授、根川幸男（ブラジリ

ア大学准教授）／日文研外国人研究員）

講演 両角貫一コレクションが捉えた日系

ブラジル移民の暮らしぶり

講演者 津田睦美（成安造形大学准教授）

講演 強制収容所に届いた妻の手紙―仏領

ニューカレドニアの沖繩移民

司会 井上章一副所長

国際研究集会

第四五回〔平成二五年一月二五日（月）〕

二七日（水）

テーマ 怪異・妖怪文化の伝統と創造―ウチ

とソトの視点から

研究代表者 小松和彦所長

参加者 一〇七名（国内九七名、国外一〇名）

公開講演会

【第四五回国際研究集会】

〔平成二五年一月二五日（月）〕

テーマ 怪異・妖怪文化の伝統と創造

講演 妖怪研究の新時代

講演者 小松和彦所長

講演 妖怪を殺す「妖怪」―創作／権利／

民俗

講演者 京極夏彦（小説家）

講演 欧米における怪異・妖怪文化研究の

現状

講演者 マイケル・ディラン・フォスター

（インディアナ大学准教授）／日文研外国人
研究員）

総合討論

討論者 小松和彦所長、京極夏彦（小説家）、

山田奨治教授、マイケル・ディラン・フォ

スター（インディアナ大学准教授）／日文研

外国人研究員）、常光 徹（国立歴史民俗

博物館教授）、マティアス・ハイエック（パ

リ・デイドロ大学准教授）

司会 荒木 浩教授

海外シンポジウム

〔平成二五年一月一三日（水）〕―一五日

（金）

テーマ 日越交流における歴史、社会、文化

の諸課題

場所 ベトナム社会科学院（ハノイ）

代表者 劉 建輝教授

参加者 一八五名（国内一七三名、国外一二

名）

シンポジウム

第一一八回「平成二五年一月八日(金)」

一〇日(日)」

主宰者 白幡洋三郎教授

テーマ 「大名庭園」の新発見

参加者 三九名

第一一九回「平成二六年三月五日(水)」

主宰者 細川周平教授

テーマ 関西の映画興行史の基礎調査―『合

同通信』を中心に

参加者 一四名

一般公開

「平成二五年一〇月三二日(木)」

【セミナー】

テーマ 前近代の日常生活史

話者 倉本一宏教授、パトリシア・フィス

ター教授

司会 マルクス・リュッターマン准教授

【シンポジウム】

テーマ 日本文化における折衷と習合

パネリスト 伊東貴之教授、末木文美士教

授、早川聞多教授、細川周平教授

司会 荒木 浩教授

【講演会】

テーマ 私の研究の国際性および学際性

話者 戸部良一教授、榎本 渉准教授

司会 山田奨治教授

伝統文化芸術総合研究プロジェクト公

演会

「平成二六年三月二六日(水)」

テーマ ルネサンスダンスと筑前琵琶による

「安寿と厨子王」

説明 笠谷和比古教授

第一部 座談会・楽器解説

コーディネーター 門田展弥(作曲家/追手

門学院大学客員特別教授)

ルネサンスダンス 湯浅宣子(欧州舞踏史学

協会会員)

琵琶奏者 S・ギニャール(大阪学院大学音

楽学教授)

リ्यूト奏者 佐野健二(相愛大学非常勤講

師)

ダルシマー奏者 小川美香子

第二部 実演

ダンス 湯浅宣子、村上博子、小原麻美

演出・構成 門田展弥、湯浅宣子

作曲 S・ギニャール、門田展弥

演奏 シルヴァン・旭西・ギニャール、佐野

健二、小川美香子

会議

運営会議

第三二回 平成二五年一月一三日(金)

第三三回 平成二六年三月七日(金)

調整会議

第一九七回 平成二五年一〇月二日(水)

第一九八回 平成二五年一〇月一六日(水)

第一九九回 平成二五年一月六日(水)

第二〇〇回 平成二五年一月一八日(月)

第二〇一回 平成二五年一月四日(水)

- 第二〇二回 平成二五年二月一日(水)
 - 第二〇三回 平成二六年一月八日(水)
 - 第二〇四回 平成二六年一月二二日(水)
 - 第二〇五回 平成二六年二月五日(水)
 - 第二〇六回 平成二六年二月九日(水)
 - 第二〇七回 平成二六年三月五日(水)
 - 第二〇八回 平成二六年三月八日(火)
- センター会議**
- 第一九七回 平成二五年一月三日(木)
 - 第一九八回 平成二五年一月七日(木)
 - 第一九九回 平成二五年一月七日(木)
 - 第二〇〇回 平成二五年一月二日(木)
 - 第二〇一回 平成二五年二月五日(木)
 - 第二〇二回 平成二五年二月九日(木)
 - 第二〇三回 平成二六年一月九日(木)
 - 第二〇四回 平成二六年一月二三日(木)
 - 第二〇五回 平成二六年二月六日(木)
 - 第二〇六回 平成二六年二月二〇日(木)
 - 第二〇七回 平成二六年三月六日(木)
 - 第二〇八回 平成二六年三月二〇日(木)

外国人来訪者

- 平成二五年一〇月四日 国際交流基金関西国際センター・平成二五年度専門家日本語研修(文化・学術専門家)一行
- 平成二六年三月五日 村上ジルー栄(アルザス・欧州日本学研究所副所長)、アントナン・レシュレール(ストラズブル大学日本学学科長)

海外渡航

早川聞多 教授

- 目的 大英博物館にてシンポジウム参加及び発表
 - 目的国 イギリス
 - 期間 平成二五年一〇月一日〜八日
- 山田奨治 教授**
- 目的 大英博物館、大英図書館にて資料調査
 - 目的国 イギリス
 - 期間 平成二五年一〇月一日〜一〇日

パトリシア・フィスター 教授

- 目的 敦煌市博物館、莫高窟、陽関等にて資料収集及び現地調査
- 目的国 中国
- 期間 平成二五年一〇月一〇日〜一七日

稲賀繁美 教授

- 目的 ジャワハルラル・ネルー大学にて講義
- 目的国 インド
- 期間 平成二五年一〇月一〇日〜一月五日

笠谷和比古 教授

- 目的 中国国家博物館、麗江古城、東河古城等にて資料調査
- 目的国 中国
- 期間 平成二五年一〇月二日〜八日

大塚英志 教授

- 目的 北京日本学研究センター、中国人民大学、上海外国語大学等にて講義及び史跡見学
- 目的国 中国

期間 平成二五年一〇月二日～二二日
磯前順一 准教授

目的 ボツウム大学にて講義、漢陽大学にて研究打合せ
目的国 ドイツ、韓国

期間 平成二五年一〇月一三日～一二月二〇日

劉建輝 教授

目的 四川外国語大学、復旦大学、華東師範大学にてシンポジウム参加、発表及び資料調査、研究打合せ

目的国 中国

期間 平成二五年一〇月一八日～二四日
末木文美士 教授

目的 ホテルアベンツリー鐘路、救仁寺にてシンポジウム参加、発表及び研究打合せ

目的国 韓国

期間 平成二五年一〇月二二日～二六日
戸部良一 教授

目的 中央研究院にてシンポジウム参加及び発表

目的国 台湾
期間 平成二五年一月一日～四日
大塚英志 教授

目的 シンガポール国立大学にて講演及びシンポジウム参加
目的国 シンガポール

期間 平成二五年一月六日～一〇日

細川周平 教授

目的 延和大学にて研究会参加及び発表
目的国 韓国

期間 平成二五年一月七日～九日
荒木浩 教授

目的 国際交流基金、ベトナム社会科学院にてシンポジウム参加及び発表、研究打合せ

目的国 ベトナム

期間 平成二五年一月一日～一五日
井上章一 副所長

目的 国際交流基金、ベトナム社会科学院、ハロン湾等にてシンポジウム参加及び発表、研究打合せ

目的国 ベトナム
期間 平成二五年一月一日～一七日

戸部良一 教授
目的 国際交流基金、ベトナム社会科学院、ハロン湾等にてシンポジウム参加及び発表、研究打合せ

目的国 ベトナム

期間 平成二五年一月一日～一七日
倉本一宏 教授

目的 国際交流基金、ベトナム社会科学院、ハロン湾等にてシンポジウム参加及び研究会、研究打合せ

目的国 ベトナム

期間 平成二五年一月一日～一七日
劉建輝 教授

目的 国際交流基金、ベトナム社会科学院、ハロン湾等にてシンポジウム参加及び研究会、研究打合せ

目的国 ベトナム

期間 平成二五年一月一日～一七日

榎本 渉 准教授

目的 国際交流基金、ベトナム社会科学院、ハロン湾等にてシンポジウム参加及び発表、研究打合せ

目的国 ベトナム

期間 平成二五年一月一日〜一七日

北浦寛之 助教

目的 国際交流基金、ベトナム社会科学院、ハロン湾等にてシンポジウム参加及び発表、研究打合せ

目的国 ベトナム

期間 平成二五年一月一日〜一七日

白幡洋三郎 教授

目的 国際交流基金、ベトナム社会科学院にてシンポジウム参加及び司会、研究打合せ

目的国 ベトナム

期間 平成二五年一月二日〜一五日

小松和彦 所長

目的 国際交流基金、ベトナム社会科学院、ハロン湾等にてシンポジウム参加及び

講演、研究打合せ

目的国 ベトナム
期間 平成二五年一月二日〜一七日
山田奨治 教授

目的 ベトナム社会科学院、ハロン湾、ハ

ノイ大学等にてシンポジウム参加及び講演、講義、研究打合せ

目的国 ベトナム

期間 平成二五年一月二日〜二二日

ジョン・ブリン 教授

目的 ロンドン大学SOASにてシンポジウム参加及び発表、ノックにて巡礼地の見学及び調査

目的国 イギリス、アイルランド

期間 平成二五年一月一日〜二五日

マルクス・リュッターマン 准教授

目的 ベルリン・ブランデンブルグ学士院にて授賞式出席、講義及び講演

目的国 ドイツ

期間 平成二五年一月二三日〜一二月三日

細川周平 教授

目的 ゲーテハウス、映画博物館、ケルン日本文化会館にてシンポジウム参加、発表及び資料調査

目的国 ドイツ

期間 平成二五年一月二四日〜一二月三日

日

松田利彦 教授

目的 三亜大学にて講義及び史跡調査

目的国 中国

期間 平成二五年一月二七日〜三〇日

大塚英志 教授

目的 トゥールズ・ゲームショウ、Touhou Mangaにてワークショップ参加、講義及び情報収集

目的国 フランス

期間 平成二五年一月二八日〜二月五日

日

稲賀繁美 教授

目的 ベルリン自由大学美術史研究所、ベルリン国立美術館にてシンポジウム参加及

び発表

目的国 ドイツ
 期間 平成二五年一月四日〜九日
 荒木 浩 教授
 目的 韓国釜山（雲海台）グラランドホテルにてシンポジウム参加及び発表
 目的国 韓国
 期間 平成二五年一月六日〜九日
 郭 南燕 准教授
 目的 ホーチミン市人文社会科学大学にてシンポジウム参加及び発表
 目的国 ベトナム
 期間 平成二五年一月二日〜二五日
 倉本一宏 教授
 目的 ホーチミン市人文社会科学大学、ホーチミン市歴史博物館、ベトナム歴史博物館にてシンポジウム参加及び発表、史料調査
 目的国 ベトナム
 期間 平成二五年一月二日〜二六日

北浦寛之 助教

目的 チュラロンコン大学にて資料調査
 目的国 タイ
 期間 平成二五年一月二日〜二七日
 郭 南燕 准教授
 目的 上海図書館にて資料調査
 目的国 中国
 期間 平成二六年一月二日〜一七日
 戸部良一 教授
 目的 国際交流基金ニューデリー日本文化センターにて講義及び研究指導
 目的国 インド
 期間 平成二六年一月二九日〜二月二日
 荒木 浩 教授
 目的 国際交流基金ニューデリー日本文化センターにて講義及び研究指導
 目的国 インド
 期間 平成二六年一月二九日〜二月二日
 白幡洋三郎 教授
 目的 ニュルンベルク市立図書館にて資料調査

目的国 ドイツ

期間 平成二六年一月三〇日〜二月四日
 荒木 浩 教授
 目的 ハイデルベルグ大学にてワークショップ参加及び発表
 目的国 ドイツ
 期間 平成二六年二月七日〜二月二日
 倉本一宏 教授
 目的 国立金海博物館、咸安博物館、大伽耶博物館にて資料調査及び現地調査
 目的国 韓国
 期間 平成二六年二月三日〜二六日
 郭 南燕 准教授
 目的 上海図書館にて資料調査
 目的国 中国
 期間 平成二六年二月二六日〜三月四日
 山田奨治 教授
 目的 ブカレスト大学にてシンポジウム参加及び発表
 目的国 ルーマニア
 期間 平成二六年二月二七日〜三月六日

小松和彦 所長

目的 ベオグラード大学にてシンポジウム

参加及び発表

目的国 セルビア

期間 平成二六年三月九日～一五日

末木文美士 教授

目的 ベオグラード大学にてシンポジウム

参加及び発表

目的国 セルビア

期間 平成二六年三月九日～一五日

細川周平 教授

目的 ベオグラード大学にてシンポジウム

参加及び発表

目的国 セルビア

期間 平成二六年三月九日～一五日

戸部良一 教授

目的 台湾中央研究院近代史研究所にてシン

ンポジウム参加及び発表

目的国 台湾

期間 平成二六年三月一四日～一七日

松田利彦 教授

目的 釜山近代歴史館、旧小鹿島更正園、

愛養院にて資料調査及び現地調査

目的国 韓国

期間 平成二六年三月一五日～二〇日

郭南燕 准教授

目的 上海図書館にて資料調査

目的国 中国

期間 平成二六年三月二一日～二五日

細川周平 教授

目的 マドリード自治大学、セビリア大

学、サラゴザ大学等にてシンポジウム参

加、発表及び講義、研究打合せ

目的国 スペイン

期間 平成二六年三月二三日～四月四日

大塚英志 教授

目的 VIA University College, DGH-byen

にてワークショップ参加及び講演

目的国 デンマーク

期間 平成二六年三月二五日～三一日

パトリシア・フィスター 教授

目的 ペンシルバニア美術館、ペンシルバ

ニアマリオットホテル、ペンシルバニア大

学にてシンポジウム参加、研究打合せ及び

情報収集

目的国 アメリカ

期間 平成二六年三月二五日～四月一日

郭南燕 准教授

目的 ペンシルバニアマリオットホテル、

ペンシルバニア大学にてシンポジウム参

加、研究打合せ及び情報収集

目的国 アメリカ

期間 平成二六年三月二七日～四月一日

所員活動一覧（二〇一三年一月一日～二〇一四年三月三十一日）

荒木 浩

●著書

『高等学校 古典B 古文編』（伊井春樹他と共著）第一学習社 二〇一四年二月 二五六頁

『高等学校 標準古典B』（伊井春樹他と共著）第一学習社 二〇一四年二月 三〇四頁

『高等学校 標準古典A 物語選』（伊井春樹他と共著）第一学習社 二〇一四年二月 二〇八頁

『かくして「源氏物語」が誕生する 物語が流動する現場にどう立ち会うか』笠間書院 二〇一四年三月 四〇五頁

●論文

「東アジアに立つ日本古典文学研究—インドとベトナムという場と視点から—」『第4回東アジア日本研究フォーラム 東アジアにおける日本研究の国際協力と連携』（二〇一三年二月七日～八日、釜山海雲台グランドホテル、主催：韓国日本学会、国際交流基金、後援：秀林文化財団） 三三～三五頁

「四方四季と三時殿—日本古典文学の庭と景観をめぐって—」白幡洋三郎編『作庭記』と日本の庭園』思文閣出版 二〇一四年三月 二一三～二三五頁

「スパイラルなクロニクル—説話文学研究と一九五〇年代の視覚文化」劉建輝・佐野真由子編『日本研究』再考—北欧の実践から—北欧シンポジウム二〇一二—』国際日本文化研究センター 二〇一四年三月 一一九～一二九頁

●その他の執筆活動

「もっと知りたい！（2） 政治と文学が濃密に絡み合った院政期」『週刊 新発見！日本の歴史』一七号 朝日新聞出版 二〇一三年一〇月 二六～二七頁

「特集 夢か、うつつか 『夢をみる／夢をかく』」『月刊みんぱく』二〇一四年三月号 国立民族学博物館 二〇一四年三月 二～三頁

「知らねば 平成二六年度前学期総研大生セミナー 研究者インタビュー」『総合研究大学院大学』二〇一四年三月 一〇～一三頁

「総研大の広報活動―世界戦略としての学生リクルート」『日教研』五二号 二〇一四年三月 六一～六三頁

磯前順一

●著書

『ザ・タイガース 世界はボクらを待っていた』集英社新書 二〇一三年一月 二八六頁

『종교와 식민지 근대―한국종교의 내면화 정치화는 어떻게 진행되었나』책과 함께 2023년『宗教と植民地近代―韓国宗教の内面化、政治化はどのように進行されたか』本とともに社」

●論文

「祀られざる神の行方―神話化する現代日本」『現代思想』二〇一三年二月増刊号 青土社

「ザ・タイガースとルー・リード―日本ロック史の盲点」『KAWADE 夢ムック ルー・リード』河出書房新社 二〇一四年一月

「無垢なるナルシズム―『はだしのゲン』と戦後日本の平和主義の行方」『「はだしのゲン」を読む』河出書房新社 二〇一四年二月 一八〇～一九一頁

●その他の執筆活動

「ザ・タイガース 四四年後の音―自分の生き様を表現」『中外日報』二〇一四年一月二三頁

「ぶんかのミカタ 改めて、恋愛（上） 終わりなき旅が『出会い』生む」『毎日新聞』（大阪版・夕刊） 二〇一四年二月二〇日

伊東貴之

●著書

苅部直・片岡龍編（郭連友・李斌瑛等訳）『日本思想史入門』（共著）北京・外語教学与研究出版社 二〇一三年二月 三四六頁

●論文

「伝統中国をどう捉えるか?―研究史上のポレミックに見る儒教の影」『現代思想』二〇一四年三月号「特集…いまなぜ儒教か」vol. 四二―四

青土社 一五四～一六六頁

●その他の執筆活動

『項目執筆』『王夫之』『王鳴盛』『顔元』『顧炎武』『費密』『熊伯竜』『李塨』『呂留良』岩波書店辞典編集部編『岩波 世界人名大辞典』岩波書店 二〇一三年二月

『街場の「中国」論も花盛り！——異質で不可解な隣人と如何に向き合うか、という姿勢こそ』〔二〇一三年／中国文学・文化・年末回顧〕『図書新聞』第三一九九号 二〇一三年二月二日号

『項目執筆』『朱子学与陽明学』『專欄・中国情趣与中国学』『思想家群像・島田虔次』荻部直・片岡龍編（郭連友・李斌瑛等訳）『日本思想史入門』北京・外語教学与研究出版社 二〇一三年二月

『平成二四年度釋奠記念講演 現代中国における儒教の復興とその意義』史跡足利学校研究紀要「學校」第一二号 二〇一四年三月 一八七～二〇七頁

『書評 井上進著『明清學術變遷史——出版と伝統學術の臨界点——』』『東洋史研究』（東洋史研究会）第七二卷第四号 二〇一四年三月 七一～八五頁

稲賀繁美

●著書

『絵画の臨界——近代東アジア美術史の桎梏と命運』名古屋大学出版会 二〇一四年一月 七八八頁

Vocabulaire de la spatialité japonaise, Philippe Bonnin, Nishida Masatsugu et Inaga Shigemitsu eds., CNRS Éditions, Jan. 2014, pp. 605.

●論文

『西欧モデルニテに対峙する日本の伝統工藝——アンリ・フォションの両大戦間期の考察を導きに』三浦篤編『往還の軌跡——日仏芸術交流の一五〇年』二四一～二六五頁 “Arts et métiers traditionnels au Japon face à la Modernité occidentale (1850–1900): A l'écoute d'Henri Focillon? quelques observations préliminaires,” *Projeteurs d'aller-retours: 150 ans d'échanges artistiques franco-japonais*, pp. 122–134 三三社 二〇一三年

一一月

『日本美』から『東洋美』へ?——継承と再編の軌跡」 荻部直・黒住真・佐藤弘夫・末木文美士編『岩波講座 日本の思想 第七巻 儀礼と創造——美と芸術の原初——』岩波書店 二〇一三年二月 二六七〜二九一頁

『思想の言葉・『道ハ沖ナリ』——器と亀裂(ギャップ)についての断章』『思想』二〇一四年第一号 No. 1077 岩波書店 二〇一四年一月二〜五頁

『遺伝子情報の繭に包まれた蛹はなにを考えるか?——工藤哲巳没後二五年回顧展に寄せて』『あいだ』二一〇号(連載第九九回) 二〇一四年一月 三五〜四二頁

『交易の海賊史観にむけて…美術品交易を中心にして』徐興慶編『日本学研究叢書八 近代東アジアのアポリア』国立台湾大学出版中心 二〇一四年一月 一二三〜一五二頁

『市場価値形成の一齣…モダニスト美学の起源と市場調査の昇華…エドゥアール・マネ売り立てにおける市場戦略』永井隆則編『探求と方法…フランス近現代美術史を解剖する…文献学、美術館行政から精神分析・ジェンダー論以降へ』晃洋書房 二〇一四年三月 一三九〜一六二頁

『二支神 午——馬イメージの日本の変貌』『あいだ』二一一号(連載第一〇〇回) 二〇一四年三月 三二〜三六頁

『敗戦後』と『近代以降』のあいだ…晚期前衛時代の日本美術を鳥瞰する歴史史料の英訳選集を吟味する——*From Postwar to Postmodern: Art in Japan 1945-1989* 書評』『表象』〇八 月曜社 二〇一四年三月 二三四〜二三八頁

●その他の執筆活動

『美術館と記憶の磁場』『交差する表現—工芸／デザイン／総合芸術 Cross-Sections 1963-2013』展によせ』京都国立近代美術館ニュース『視る』四六五号 二〇一三年二〇月 五〜八頁

『日本文化の海外交信前線基地 パリのジュンク堂書店——書店の現在を考える(4)』『図書新聞』第三一三二号(連載一三九) 二〇一三年一〇月

『書評 遠田勝著『転生する』物語—小泉八雲「怪談」の世界—』(新曜社、二〇一一年)』『比較文学研究』第九八号 東大比較文学会 二〇一三年一〇月 一五〇〜一五五頁

「第一三回国際神道研究会『西洋作家の神道観―日本人のアイデンティティを求めて―』『神園』第一〇号 明治神宮国際神道文化研究所
二〇一三年一月 二九～三六頁

「知的偽善への対抗のために―『世界美術史』構想とその陥穽(1)』『図書新聞』第三二四八号(連載一四〇) 二〇一四年三月

「アメリカ・シェルギルとその『姉妹』たち―『全球的世界美術史』構想とその陥穽(2)』『図書新聞』第三二四九号(連載一四一)
二〇一四年三月

「透視図法的 master narrative の彼方へ―『全球的世界美術史』構想とその陥穽(3)』『図書新聞』第三二五〇号(連載一四二) 二〇一四年
三月

「譬話の伝授(知性の世代相統のために)』藤原書店編集部編『内田義彦の世界1913-1989 生命・芸術そして学問』藤原書店 二〇一四年三月
七六～七八頁

「フランスの研究所と大学システム』『日文研』五二号 二〇一四年三月 四九～五二頁

井上章一

●著書

『日本人とキリスト教』角川学芸出版 二〇一三年一〇月

●その他の執筆活動

「思春期の性にたちむかう子供たち』『青少年問題』第六五二号(第六〇巻秋季号) 二〇一三年一〇月

「書評 大津雄一著『平家物語』の再誕』『日本経済新聞』(夕刊) 二〇一三年一〇月二日

「書評 下川耿史著『混浴と日本史』(筑摩書房)』『週刊読書人』二〇一三年一〇月一八日号

「書評 秋山敏郎著『ダ・ヴィンチ封印』(タワウラ・ドーリア)の五〇〇年』『日本経済新聞』(夕刊) 二〇一三年一〇月二三日

「書評 渡辺裕著『サウンドとメディアの文化資源学』』『日本経済新聞』(夕刊) 二〇一三年一月一三日

「パネルディスカッション 日本の美学『陰翳礼讃』』(ジョン・バー・面出薫・たつみ都志と)『武庫川女子大学生活美学研究所秋季シンポジウ

ム記録集』二〇一三年一月

「東南アジアの民族建築から、日本列島の建築史を読みなおす」『第二〇回海外シンポジウム紀要「日越交流における歴史、社会、文化の諸課題」』国際日本文化研究センター 二〇一三年一月三日～四日

「書評」図説 アルプスの少女ハイジ 「ハイジ」でよみとく一九世紀スイス」ちばかおり・川島隆／河出書房新社』『週刊ポスト』二〇一三年一月八・一五、二〇日号

「講演 美人の運命を、古典に見る」『京都語文』二〇号 佛敎大学国語国文学会 二〇一三年一月 四六～五六頁

「現代の建築家・一六 菊竹清訓―スカイハウスは、こう読める」『GAJAPAN』125 二〇一三年一月

「書評 磯田道史著『歴史の読み解き方』」『日本経済新聞』（夕刊）二〇一三年二月四日

「書評 戸田学著『上岡龍太郎 話芸一代』」『日本経済新聞』（夕刊）二〇一三年二月二五、二六日

「回顧二〇一三 私の三冊」『日本経済新聞』二〇一三年二月二九日

「東方の文化と風俗に驚く八冊」『NARASIA Q』Vol. 6 奈良県 二〇一四年一月 二四～二六頁

「年末年始はこれを読め 音楽がはぐくまれる背景」『週刊ポスト』二〇一四年一月一〇日号

「第一七回司馬遼太郎賞選評」『遼』五〇号 司馬遼太郎記念館 二〇一四年一月

「書評 鶴見太郎著『座談の思想』」『日本経済新聞』（夕刊）二〇一四年一月二二日

「書評『花森安治伝 日本の暮しをかえた男』津野海太郎／新潮社」『週刊ポスト』二〇一四年一月二四日号

「特別座談会 中村彰彦×氏家幹人×井上章一 日本が誇る『性の偉人』たち」『週刊現代』二〇一二年一月二五日／二月一日合併号

「現代の建築家・一七 黒川紀章―言葉か建築か」『GAJAPAN』126 二〇一四年一月

「書評 小野幸恵著『焼け跡の「白鳥の湖」』」『日本経済新聞』（夕刊）二〇一四年二月一二日

「周りのおせっかい消えた」『朝日新聞』二〇一四年二月四日

「名望家のつとめ」（再録）京都新聞社編『日本人の忘れもの 京都、ここに 第二部』二〇一四年二月

「エロスと交易 長崎貿易を支えた遊女のユスブレ」『週刊 エコノミスト』二〇一四年二月二五日特大号

「同級生交歓」『文藝春秋』二〇一四年三月特別号

「書評 呉座勇一著『戦争の日本中世史』」『日本経済新聞』（夕刊）二〇一四年三月五日

「市井の好奇心にこそ光」（再録）『関西よみうり懇話会』二〇一四年三月二〇日

「京がたり…日本再発見 井上章一さんの中華思想 洛中にはかにされた若き日」『毎日新聞』（東京本社版・夕刊）二〇一四年三月一九日

「書評 『つながり』の戦後文化誌 労音、そして宝塚、万博」長崎励朗著／河出書房新社『週刊ポスト』二〇一四年三月二二日号

「著述家としての建築家」（再録）二川由夫編『ル・コルビュジェ 読本』ADA・エディタ・トーキョー 二〇一四年三月

「書評 中川右介著『角川映画 一九七六―一九八六』」『日本経済新聞』（夕刊）二〇一四年三月二六日

「日文研の中庭で想うこと」『日文研』五二号 国際日本文化研究センター 二〇一四年三月

「大会講演 歴史は、こうしてつくられる」『史叢』第九〇号 日本大学史学会 二〇一四年三月

「現代の建築家・一八 篠原一男―日本の『虚空』に魅せられて」『GAJAPAN』127 二〇一四年三月

牛村 圭

●論文

「東京裁判を学び、そして語るために―『極東国際軍事裁判審理要録』刊行の快挙を寿ぐ―」『正論』二〇一四年二月号 二九八〜三〇七頁

●その他の執筆活動

「東京裁判研究史のなかの『バル判決』」『比較法制研究』第三六号 国士舘大学 一九九〜二二六頁

榎本 渉

●その他の執筆活動

「書評 渡邊誠著『平安時代貿易管理制度史の研究』」『社会経済史学』第七九卷第三号 社会経済史学会 二〇一三年一月 一三五〜一三七頁

「この人に注目！時代のキーパーソン 一山一寧」『週刊 新発見！日本の歴史』二〇号 朝日新聞出版 二〇一三年一月 七頁
「日宋貿易の拠点だった貿易港・博多」『週刊 新発見！日本の歴史』二一号 朝日新聞出版 二〇一三年一月 二四頁
「地図で見る明の支配と東アジアの交易」『週刊 新発見！日本の歴史』二五号 朝日新聞出版 二〇一三年一月 二六～二七頁

大塚英志

●著書

『多重人格探偵サイコ』一九卷（田島昭宇と共著）株式会社KADOKAWA 二〇一三年一〇月 一八〇頁
『黒鷲死体宅配便』一八卷（山崎峰水と共著）株式会社KADOKAWA 二〇一三年一〇月 一九二頁
『キャラクター小説の作り方』星海社 二〇一三年一〇月 三五二頁
『ストーリーメーカー 創作のための物語論』星海社 二〇一三年一月 三〇二頁
『ヨヨとネネとかいじゅうのタネ』（ひらりと共著）徳間書店 二〇一三年一月 四二頁
『とでんか』七卷（樹生ナトと共著）株式会社KADOKAWA 二〇一四年一月 一九四頁
『松岡國男妖怪退治』四卷（山崎峰水と共著）株式会社KADOKAWA 二〇一四年一月 一九二頁
『キャラクターメーカー 6つの理論とワークショップで学ぶ「つくり方」』星海社 二〇一四年二月 二八〇頁
『캐릭터 소설쓰는 법』(공민이 김성민) 북바이북 二〇一三年一〇月 三四四頁
『스토리메이커』(공민이 신정호) 북바이북 二〇一三年一〇月 二七六頁

●論文

「山人双極論——柳田國男におけるロマン主義と社会政策論」『プラス18』太田出版 二〇一三年一月 五六～七八頁

「神戸芸術工科大学まんが教育7年間の総括——ぼくたちはまんがを教える大学で何を研究したか——」『POBIO Critiques #0』太田出版

二〇一四年三月 四～四七頁

『鉄扇公主』と『海の神兵』——東アジアまんが・アニメーション研究に向けて——『POBIO Critiques #0』太田出版 二〇一四年三月

八二～九五頁

“An Unholy Alliance of Eisenstein and Disney: The Fascist Origins of Oraku Culture.” *MECHADEMIA* 8, University of Minnesota Press, 2013, pp. 251～277.

「Perspectives/An Essay on Patriotic Boys: The Structure of Emperor Discourses as Japanese Bildungsroman」『한민대평 제9호』二〇一三 하반기

二〇一三年 一六六～一九三頁

●その他の執筆活動

『火垂るの墓』解題』『ジブリの教科書4 火垂るの墓』文藝春秋 二〇一三年一〇月 二二八～二四六頁

『魔法の宅急便』解題』『ジブリの教科書5 魔法の宅急便』文藝春秋 二〇一三年一二月 二八七～三〇八頁

『おもひでぼろぼろ』解題』『ジブリの教科書6 おもひでぼろぼろ』文藝春秋 二〇一四年三月 二八九～三一頁

『書評』『アニメージュ コミックス スペシャル フィルム コミック 風立ちぬ(上・下)』『週刊ポスト』二〇一三年一月一八号

『書評』『須藤遙子「自衛隊協力映画」』『細馬宏通「ミッキーはなぜ口笛を吹くのか」』『トーマス・ラマール著／藤木秀明・大崎晴美訳「アニメ・マシーン グローバル・メディアとしての日本アニメーション」』『週刊ポスト』二〇一三年二月二〇号

『書評』宗近真一郎『バリ、メランコリア』『週刊ポスト』二〇一四年一月三十一号

『書評』師岡康子『ヘイト・スピーチとは何か』『週刊ポスト』二〇一四年三月二一日

『多重人格探偵サイコ』(田島昭宇と共著)『ヤングエース』二〇一三年一月号～二〇一四年四月号 株式会社KADOKAWA

『黒鷲死宅配便』(山崎峰水と共著)『ヤングエース』二〇一三年一月号～二〇一四年四月号 株式会社KADOKAWA

『八雲百怪』(森美夏と共著)『ヤングエース』二〇一三年一月号～二〇一四年四月号 株式会社KADOKAWA

『世界まんが塾』(第二回～第七回)『ヤングエース』二〇一三年一月号～二〇一四年四月号 株式会社KADOKAWA

『もどき開口 木島日記 完結編』『怪物の民俗学』第五回、「恋する民俗学者」(中島千晴と共著)『怪』Vol. 0040 株式会社KADOKAWA

二〇一三年一月

「とでんか」(樹生ナトと共著)、「松岡國男妖怪退治」(山崎峰水と共著)、「死舞能」(谷岡曜子と共著)『コミック怪』Vol. 24 二〇一三年秋号

株式会社 KADOKAWA 二〇一三年一〇月

「二階の住人とその時代」(連載)『熱風』二〇一三年一〇月号〜二〇一四年三月号 株式会社スタジオジブリ

郭南燕

●著書

『世界の日本研究二〇一三』(編著) 国際日本文化研究センター 二〇一三年一〇月

Refining Nature in Modern Japanese Literature: The Life and Art of Shiga Naoya, Lexington Books, February 2014.

●論文

「上海語の復興——言語文化の『雑多性』を考える」木部暢子・小松和彦・佐藤洋一郎編『アジアの人びとの自然観をたどる』勉誠出版

二〇一三年一月 一九三〜二〇七頁

●その他の執筆活動

「座談会2 フィールドとしての中国」(窪田順平・佐藤洋一郎・村松伸と)木部暢子・小松和彦・佐藤洋一郎編『アジアの人びとの自然観をたどる』勉誠出版 二〇一三年一月 二八九〜三四一頁

笠谷和比古

●著書

『武士道——侍社会の倫理と文化』NTT出版 二〇一四年二月 一七四頁

●その他の執筆活動

「武士道」「赤穂事件論」石田一良・石毛忠編『日本思想史事典』東京堂出版 二〇一三年一〇月

「近世の幕府と朝廷(七) 紫衣事件(続)」『究』一〇月号(通巻第三二号) ミネルヴァ書房 二〇一三年一〇月

「近世の幕府と朝廷(八) 明正女帝の即位」『究』十一月号(通巻第三三二号) ミネルヴァ書房 二〇一三年十一月

「大石内蔵助と茶の湯」『なごみ』二〇一三年二月号 淡交社

「近世の幕府と朝廷（九）家光政権と朝幕関係の転回」『究』二月号（通巻第三三三号）ミネルヴァ書房 二〇一三年二月

「近世の幕府と朝廷（一〇）後水尾天皇と東福門院」『究』一月号（通巻第三四号）ミネルヴァ書房 二〇一四年一月

「近世の幕府と朝廷（一一）朝廷官位と近世武家社会（一）」『究』二月号（通巻第三五号）ミネルヴァ書房 二〇一四年二月

「近世の幕府と朝廷（一二）朝廷官位と近世武家社会（二）」『究』三月号（通巻第三六号）ミネルヴァ書房 二〇一四年三月

北浦寛之

●その他の執筆活動

「資料整理の意義と可能性」『神戸の映像文化―「神戸と映画」「神戸映像アーカイブプロジェクト」の取り組み』神戸ドキュメンタリー映画祭実行委員会 二〇一四年三月

倉本一宏

●著書

『講談社選書メチエ 藤原道長「御堂関白記」を読む』講談社 二〇一三年二月 二六九頁

●論文

「大王の朝廷と推古朝」『岩波講座 日本歴史第二巻 古代二』岩波書店 二〇一四年三月 一〜三四頁

●その他の執筆活動

「本当は激務だった平安貴族」「壬申の乱の陰に『唐VS新羅の戦争』」「文藝春秋」二〇一三年一月号 二八六〜二八七頁、二九二〜二九四頁
「世界が驚愕した日本人五四人 藤原道長 資本論に並んだ御堂関白記」『文藝春秋』二〇一四年新年特別号 三〇〇〜三〇三頁

小松和彦

● 著書

『アジアの人びとの自然観をたどる』（木部暢子・佐藤洋一郎と共編）勉誠出版 二〇一三年一月

● 論文

「カミの変遷 刈部直・黒住真・佐藤弘夫・末木文美士編『岩波講座 日本の思想第八巻 聖なるものへ——躍動するカミとホトケ』岩波書店 二〇一四年一月

● その他の執筆活動

「座談会1 東アジア海の文化と歴史―地域を越えた普遍性と固有性」（木部暢子・窪園晴夫・佐藤洋一郎・中野孝教・安井真奈美と）木部暢

子・小松和彦・佐藤洋一郎編『アジアの人びとの自然観をたどる』勉誠出版 二〇一三年一月

「解説」高橋克彦著『長人鬼』（日経文芸文庫）日本経済新聞出版社 二〇一四年一月

「『ミステリアス京都』ミステリアス京都は幻想のなかにある（上）」『創造する市民』第一〇二号（公財）京都市生涯学習振興財団 二〇一四年一月

「序文」山本眞樹編『怪の壺 復刻版…あやしい古典文学』学研マーケティング 二〇一四年二月

「日本の妖怪観念の基層を考える」『要旨』劉建輝・佐野真由子編『日本研究』再考——北欧の実践から——北欧シンポジウム二〇一二』国際

日本文化研究センター 二〇一四年三月

「研究所としての日文研」『日文研』五二号 国際日本文化研究センター 二〇一四年三月

佐野真由子

● 著書

Rethinking "Japanese Studies," from Practices in the Nordic Region. Liu Jianhui and Sano Mayuko eds., International Research Center for Japanese Studies, 2014.

●その他の執筆活動

「幕末 初代駐日英国公使オールコックの富士登山」『環—歴史・環境・文明』Vol.55 藤原書店 二〇一三年一〇月

末木文美士

●著書

『日本仏教入門』（角川選書） 角川学芸出版 二〇一四年三月 二七九頁

『シリーズ大乘仏教五 仏と浄土』（共編著） 春秋社 二〇一三年一〇月

『シリーズ大乘仏教一〇 大乘仏教のアジア』（共編著） 春秋社 二〇一三年一〇月

『シリーズ大乘仏教八 如来蔵と仏性』（共編著） 春秋社 二〇一四年一月

『岩波講座 日本の思想』第三巻、第七〜八巻（刈部直・黒住真・佐藤弘夫と共編） 岩波書店 二〇一三年一二月、二〇一四年一月、二月

『妙貞問答を読む——ハビアンの仏教批判』（編著） 法蔵館 二〇一四年三月 四八七頁

『ブッダの変貌——交錯する近代仏教』（共編著） 法蔵館 二〇一四年三月 四二六頁

●論文

「阿弥陀仏浄土の誕生」『シリーズ大乘仏教五 仏と浄土』春秋社 二〇一三年一〇月 二一〇〜二三八頁

「大乘非仏説論から大乘仏教成立論へ——近代日本の大乘仏教言説」『シリーズ大乘仏教一〇 大乘仏教のアジア』春秋社 二〇一三年一〇月

二八五〜三二二頁

「批判的思維の有効性——マルクス主義と日本思想史」『日本の哲学』第一四号 昭和堂 二〇一三年一二月 九四〜一〇九頁

「親鸞像の形成——親鸞の見た親鸞、恵信尼の見た親鸞」『東方学報（京都）』第八八冊 京都大学人文科学研究所 二〇一三年一二月 二二一

〜二四三頁

「儀礼と創造——美・芸術から儀礼の場へ」『岩波講座 日本の思想 第七巻 儀礼と創造——美と芸術の原初』岩波書店 二〇一三年一二月

三〜二七頁

「死者と時間について」月本昭男先生退職記念献呈論文集第一巻「世界の宗教といかに向き合うか」聖公会出版 二〇一四年三月 二二一～二二七頁

「高山寺所蔵高麗版統藏写本に見る近代仏教」『平成二五年度高山寺典籍文書綜合調査団研究報告論集』 二〇一四年三月 三～五頁

「田辺元『懺悔道としての哲学』をめぐる」『奥田聖應先生頌寿記念インド学仏教学論集』佼成出版社 二〇一四年三月 一〇七七～一〇八五頁

「妙貞問答」をめぐる」『妙貞問答を読む——ハビアンンの仏教批判』法蔵館 二〇一四年三月 三〇三～三二〇頁

「総論 伝統と近代」末木文美士・林淳・吉永進一・大谷栄一編『ブッダの変貌——交錯する近代仏教』法蔵館 二〇一四年三月 三二一～三四五頁

●その他の執筆活動

「近代と宗教（連載）『朝日新聞』（大阪本社版・夕刊）二〇一三年一〇月二八日、一一月二五日、一二月一六日、二〇一四年一月二七日、二月二四日、三月三十一日

「解説」井上章一著『日本人とキリスト教』角川学芸出版 二〇一三年一〇月 二二七～二三四頁

「マイナスはプラスに転化できない」『児童心理』二〇一三年一〇月号臨時増刊 金子書房 二〇一三年一〇月 九六～一〇二頁

「災害天罰論を再度考える」『中外日報』二〇一三年一〇月五日号

「新しい親鸞像をめざして」『信道二〇一二』（信道講座年間講義録）真宗大谷派名古屋別院 二〇一三年一〇月 四一～六三頁

「書評 島内景二著『心訳「鳥の空音（そらね）」——元禄の女性思想家、飯塚染子、禪に挑む』（笠間書院）』『週刊読書人』二〇一三年一月一九日号

「鼎談『日蓮思想の現代的意義』』『中外日報』二〇一三年一月二二日号

「インタビュー『死者との関わり 見直す時』』『読売新聞』（夕刊）二〇一三年二月一六日

「対談『仏教の倫理、正法の仏教史』』『中外日報』二〇一三年一月一日、三日、七日号

「浄土という問題系」『中日新聞』『東京新聞』二〇一四年一月二五日、二月一日、二月八日

「日本仏教史の中の近代（講演記録）」智山伝法院編・廣澤隆之・宮坂有洪監修『近代仏教を問う』春秋社 二〇一四年一月 七三～八六頁

「書評『井筒俊彦全集』』『中外日報』二〇一四年一月一日号

「書評 小山聡子著『親鸞の信仰と呪術―病氣治療と臨終行儀』『史境』六七号 歴史人類学会 二〇一四年三月 八八〜九三頁
 「日本仏教の課題とその可能性(講演記録)」大谷大学真宗総合研究所真宗同朋会運動研究班『同朋会運動の原像―体験告白と解説』法藏館
 二〇一四年三月 一一七〜一三五頁

「書評 島蘭進『日本仏教の社会倫理』『東方』二九 二二二〜二三三頁

瀧井一博

●著書

Ito Hirobumi, Japan's First Prime Minister and Father of the Meiji Constitution, translated by Manabu Takechi, Routledge, 2014.

●論文

「植民地帝国大学のエートス―台北帝国大学初代総長幣原坦の思想形成」酒井哲哉・松田利彦編『帝国日本と植民地大学』ゆまに書房 二〇一四年
 二月 四五〜七四頁

「伊藤博文とユナイテッド・ステーツ (United States) ―ステーツマン (Statesman) としての制度哲学」戸部良一編『近代日本のリーダーシッ
 プ―岐路に立つ指導者たち』千倉書房 二〇一四年三月 二二〜四一頁

●その他の執筆活動

「明治憲法の制定とドイツの影響」日独交流史編集委員会編『日独交流―一五〇年の軌跡』雄松堂書店 二〇一三年一〇月 七〇〜七六頁
 「政治学の古典を読む(五) ガバナンスと生政治」『究』一一月号(通巻第三二号) ミネルヴァ書房 二〇一三年一月 四四〜四五頁
 「政治学の古典を読む(六) 『文の政治家』の実像」『究』二月号(通巻第三五号) ミネルヴァ書房 二〇一四年二月 四四〜四五頁
 (書評) "The Constitution of Japan: A Contextual Analysis, by Shigenori Matsui, Hart Publishing, Oxford, 2011." *Journal of Japanese Studies*, 40:1, 2014,
 pp. 235–239.

早川聞多

● 論文

“Who Were the Audiences for Shunga?” *The Exhibition Catalogue of Shunga: sex and pleasure in Japanese art*, The British Museum Press, October 3, 2013, pp. 34–47.

“Listening to the Voices in Shunga,” *The Exhibition Catalogue of Shunga: sex and pleasure in Japanese art*, The British Museum Press, October 3, 2013, pp. 162–168.

「対談 原点はデーターベース化」京都から春画を発信する 早川聞多×石上阿希』『芸術新潮』二〇一三年一二月号 二〇一三年十一月 七〇～七三頁

● その他の執筆活動

『江戸の春画を知りたい』（監修）学研ハブリッキング 二〇一三年一〇月

“SHUNGA: Ten Questions and Answers,” translated by Andrew Gerstle, *Nichibunken Monograph Series No. 14*, International Research Center for Japanese Studies, December 2013.

パトリシア・フィスター

● 論文

“In Memoriam? Rethinking the Portrait Sculptures of Princess-Abesses Enshrined in the Dharna Hall at Shimmyoji Temple.” *Rethinking Japanese Studies, from Practices in the Nordic Region*, Liu Jianhui and Sano Mayuko eds., International Research Center for Japanese Studies, 2014, pp. 63–73.

ジョン・ブリン

● 著書

Last, Commerce, and Corruption: An Account of What I Have Seen and Heard, by an Edo Samurai, translated by Mark Teuwen, Kate Wildman Nakai,

Miyazaki Fumiko, Anne Warthall, and John Breen, Columbia University Press, February 2014, pp. 496.

● 論文

“Popes, Bishops, and War Criminals: Reflections on Catholics and Yasukuni in Post-war Japan,” reprinted in Michael Bathgate ed., *Course Reader 10: “Religion in modern Asia: Tradition, state and society.” The Asia Pacific Journal, Japan Focus*, 2013.

“The Nation’s Shrine: Conflict and Commemoration at Yasukuni, Modern Japan’s Shrine to the War Dead,” Rachel Tsang and Eric Taylor Woods eds., *The Cultural Politics of Nationalism and Nation-building: Ritual and Performance in the Forging of Nations*, Routledge, 2014, pp. 133–150.

「あら、うさやうさやー『妙貞問答』『神道のこと』について」末木文美士編『妙貞問答を読む——ノンビマンの仏教批判』（編著）法蔵館 二〇一四年三月 四三九〜四五八頁

● その他の執筆活動

「神社巡り：三ノ宮神社」『神道フォーラム』四七号 神道国際学会 二〇一三年九月 三頁

「伊勢『遷御の儀』首相参列の意味」『朝日新聞』（夕刊）二〇一三年一〇月二三日

「伊勢神宮と遷御の儀」*Nichibunken Newsletter* No. 88 二〇一三年十二月 九〜一〇頁

“Warriors,” (Translation) *Lust, Commerce, and Corruption: An Account of What I Have Seen and Heard, by an Edo Samurai*, Columbia University Press, February 2014, pp. 42–94.

“Pariah and Outcasts” (Translation) *Lust, Commerce, and Corruption: An Account of What I Have Seen and Heard, by an Edo Samurai*, Columbia University Press, February 2014, pp. 368–372.

「二〇一三年の式年遷宮に思う」『神道フォーラム』四八号 神道国際学会 二〇一四年二月 二頁

細川周平

● 著書

『コレクション・モダン都市文化 第五期 第九三巻 南米への移民』（編著）ゆまに書房 二〇一三年一二月

●論文

“Sketches of Silent Film Sound in Japan: Theatrical Functions of Ballyhoo, Orchestras, and Kabuki Ensembles,” Daisuke Miyao ed., *The Oxford Handbook of Japanese Cinema*, Oxford, 2014, pp. 288-305.

“A Glimpse at Japanese-Brazilian Literature,” *Ex Oriente Lux: Japanese Culture and We*, Kornelija Ishin and Kayoko Yamasaki eds., Faculty of Philology, University of Beograd, Beograd, 2014, pp. 100-112.

●その他の執筆活動

「音楽評 大友良英&『あまちゃん』スペシャル・ビッグバンド」『毎日新聞』（関西版・夕刊）二〇一三年一〇月一六日

「書評 油井正一著、行方均編著『ジャズ昭和史』」『週刊読書人』二〇一三年一〇月二五日号

「日々是好音——細川周平の音楽時評第一回 清水靖晃＋カール・ストーン『Just Breathing』」『アルテス』二〇一三年一〇月号 六八〜七三頁

「コラム 三沢厚彦 あんなどこにヤモリ」『中日新聞』二〇一三年一月一日

「十七音の風景（三三三） ブラジルの十二月」『ラジオ深夜便』二〇一三年一二月号 一〇四〜一〇七頁（『ブラジル俳文学』通巻三五七号・

二〇一四年二月号 一三〜二六頁、『蜂鳥』三一七号 二〇一四年一・二月号 三八〜三九頁に再録）

「コンサート評 京都賞記念ワークショップ セシル・テイラーの世界 構造と即興」『毎日新聞』（関西版）二〇一三年一月二七日

「インタビュー 南米ブラジルに、日本語で『文学する』人びとがいる」『都市問題』二〇一三年一二月号 公益財団法人後藤・安田記念東京都

市研究所 二九〜四二頁（『ふろんていら』四〇号 二〇一三年三月号 三二〜四八頁に再録）

「書評 貴志俊彦著『東アジア流行歌アワー』」『日本経済新聞』二〇一三年一月二八日

「日々是好音——細川周平の音楽時評第二回 セシル・テイラーと田中泯——気の合う二人」『アルテス』二〇一三年一二月号 八五〜九二頁

「南米雄飛を求めて」細川周平編『コレクション・モダン都市文化 第五期 第九三巻 南米への移民』ゆまに書房 二〇一三年一二月

六五三〜六八一頁

「日々是好音——細川周平の音楽時評第三回 イースト・セントルイスのセシル・テイラー」『アルテス』二〇一四年二月号 七一〜七六頁

「書評 アンドレ・シェフネル著、昼間賢訳『始原のジャズ』」『ポピュラー音楽研究』Vol.17 日本ポピュラー音楽学会 二〇一三年 六一〜

六三頁

「報告 ベルトとブラジル日系移民史料館所蔵資料について」『人間文化研究情報資源共有化研究会報告書5』二〇一四年三月 七九〜八三頁

「座談会 ラテンアメリカの移民文化を語る」(川村湊・山脇千賀子・守屋貴嗣と)『インターカルチュラル』一二号 日本国際文化学会 風行社 二〇一四年三月 二〜二六頁

松田利彦

●著書

『帝国日本と植民地大学』(酒井哲哉と共編著) ゆまに書房 二〇一四年二月 六二四頁

●論文

「植民地大学比較史研究の可能性と課題——京城帝国大学と台北帝国大学の比較を軸として」『京城帝国大学の創設「あとがき」酒井哲哉・松田利彦編』『帝国日本と植民地大学』ゆまに書房 二〇一四年二月 二二〜四二頁、一〇七〜一四八頁、六一七〜六一八頁

「韓国駐劄軍参謀長・大谷喜久蔵と韓国・大谷関係資料を中心に」鄭炳旭・板垣竜太編『日記が語る近代・韓国・日本・ドイツの共同研究』同志社コリア研究センター 二〇一四年三月 一七五〜二〇二頁

「東亜聯盟運動に参加した朝鮮人—曹寧柱と姜永錫—趙景達・原田敬一・村田雄二郎・安田常雄編『講座 東アジアの知識人 第四卷 戦争と向き合っ—満洲事変〜日本敗戦—』有志舎 二〇一四年三月 三一〇〜三二五頁

●その他の執筆活動

「共同研究『植民地帝国日本における知と権力』」*Nichibunken News Letter* No. 88 二〇一三年一月 八〜九頁

「書評 李炯植著『朝鮮総督府官僚の統治構想』吉川弘文館 二〇一三年三月」『日本歴史』二〇一三年一月号(七八七) 吉川弘文館 一一七〜一九頁

山田 奨治

● 論文

「人文科学とコンピュータ研究会の幹事・主査だった頃——「じんもんこん」のことなど」『情報処理学会研究報告 人文科学とコンピュータ研究会報告』2013-CH-100(4) 二〇一三年一月 一～三頁

「文化財のデジタル複製・置換を考える」『カルコン美術対話委員会イニシアチブ「日米美術フォーラム〜ミュージアムの未来〜」報告書』文化庁 二〇一三年一〇月 二八～三〇頁

劉 建輝

● 著書

『国際研究集会報告書第四四集 東アジアにおける知的交流——キイ・コンセプトの再検討——』（鈴木貞美と共編）国際日本文化研究センター 二〇一三年十一月 四〇五頁

『日本研究』再考——北欧の実践から——北欧シンポジウム二〇一二——（佐野真由子と共編）国際日本文化研究センター 二〇一四年三月 二六一頁

『日華学会関連高橋君平文書資料Ⅱ』（編著）国際日本文化研究センター 二〇一四年三月 三一九頁

『東アジアにおける近代知の空間の形成』（孫江と共編）東方書店 二〇一四年三月 四四八頁

● 論文

「日中洋西壇の架け橋——陳抱一・瀧本弘之・戦暁梅編『アジア遊学一六八 近代中国美術の胎動』勉誠出版 二〇一三年一月 一八五～一九五頁

「上海の冲击——汉译洋书的日本传入与明治汉文的复兴」（中国語）胡令遠・徐静波・龐志春編『東亜文明——共振与更生』復旦大学出版社 二〇一三年一月 三三六～三五四頁

「近代東アジアの濫觴——広州十三行の歴史の意味」徐興慶編『日本学研究叢書8 近代東アジアのアポリア』国立台湾大学出版中心 二〇一四年一月 四七～六六頁

「もう一つの『近代（モダン）』ロード——一九世紀の日欧交流における広東、上海の役割」劉建輝・佐野真由子編『日本研究』再考——北欧の实践から——北欧シンポジウム二〇一二年『国際日本文化研究センター』二〇一四年三月 二一五～二二八頁

「近代知の濫觴——生成の場としての広州十三行」孫江・劉建輝編『東アジアにおける近代知の空間の形成』東方書店 二〇一四年三月 一三九～一五七頁

●その他の執筆活動

「インタビュー 日本学探見5 近代化支えた知の連帯」『京都新聞』二〇一四年三月二〇日

日文研 五十三号

二〇一四（平成二六）年九月三〇日発行

編集 坪井秀人、佐野真由子

発行 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国際日本文化研究センター

住所 〒610-1192 京都市西京区御陵大枝山町三丁目二番地

電話 (〇七五) 三三五—二二二一

ホームページ <http://www.nichibun.ac.jp>

印刷 中西印刷株式会社



NICHIBUNKEN

目

文

研

五

十

三

一

〇

四

年

九

月

一

五

日

本

文

化

研

究

七

一